光と闇の幻想

池田亀鑑

岩波書店

勝負の孤独

石田博英著

東京書房版

題字　町　春　草
装画　斎　藤　愛　子

青春の季節　9
むかしの面影　11
少年の夢　18
影響をうけた人　21
学生消費組合運動　30
喫茶店ハイネ　36
片恋の断髪少女　42
危く救われた放校　46
青春の終り　53

勝負の孤独

四十周年式の風景　172
独居の弁　183
酒を愛する　197
親と子の心　211
わが女性観　221
あとがき　237

青春の季節

むかしの面影

昭和三十二年の暮も押しつまった十二月二十三日、私は小学校のクラスメートを東京会館に招待した。男性八名、女性七名、それに私を加えて十六名、連絡のつく人は全員出席してくれた。

われわれは当時の京都府立師範学校付属小学校、現在では京都学芸大学付属小学校を昭和二年に卒業した。満三十年ぶりの邂逅である。懐かしさもひとしおであった。

それに特殊な学校のため、男女合わせて二十五人宛二クラス計五十名しか卒

業していないのだから、そのうち三割以上も東京にいることは珍らしいとしなければならない。それに私の世代の男子は長い戦争を経過し、相当の犠牲者を出しているのが普通である。

男性側のうち六名は技術者、西堀南極越冬隊長の甥もその一人であった。みんな順調に人生行路を歩んでいて相当の地位に達していた。女性側は夫君が死去されたのが二名、医師一名、大学教授一名、グランド・マザーになっている人もいた。ロスアンゼルスの女子短距離選手で現在は三段跳の田島直人氏夫人の土倉麻君もその一人であった。不幸な世代の幸福な人たちというべきであろう。そのうち中学まで一緒であった平野君という人とは、一ヵ月前中学の同窓会で二十五年ぶりであったが、他の諸君とは完全に三十年ぶりなのだ。みんなその頃の自分の年齢より遙かに大きい子供があるようになっている。

午後四時半にはじめたのだが、二次会、三次会と続いて、最後に私のアパートまで来た組が帰って行ったのは午前二時であった。京都弁が幅をきかし、幼ない想い出が果てしなかった。

私の家は当時、大文字山麓の橋本関雪邸と第二疏水を隔てていた。学校は下総町であるから二里近くある。その間、電車は出町から今出新町まで四丁場か五丁場しかない。間もなく烏丸線が延長になったが、それでもよくこんな遠いところを歩いて通ったものだと思う。田舎なら格別、都会では不思議なことに属するだろう。この通学コースを私は三人の女の子に護衛されて通った。その三人ともこの会に集まったのだから嬉しかった。

護衛という言葉は、彼女たちの用語をそのままに拝借したわけである。彼女たちは、現在の私の風貌には少年期の面影はあるにはあるが、意外なほど変っていると主張した。この十年来、代議士石田博英の名前を新聞でみて「あの博英さんやろか」と思ってはみたそうだ。然し、選挙区の秋田が、第一理解でき

ない。

私の父は冶金関係の技術者で関西で働いていたが、若いうちに退職してそのまま京都に住んだのである。従って私も中学まで京都で過ごし、最初の選挙に京都の家を売って金をつくった。

だが、「何とかして確かめてやろう」と考えた熱心な探究家がいて、ある日議員会館に来たそうだ。

そして受付嬢に、

「石田さんて、丸い顔か長い顔か」

「長い頑丈なお顔です」

「婦人公論」に田中寿美子女史が、私の顔を獰猛な顔だと書いていたことがあった。

「お年は？」

「五十歳位でしょうか」

この結果、彼女は、

「やっぱり違う人や。あのハナタレの博英さんがあんなになる筈がない」と断定を下した。

それ程、私の顔は丸かった。赤痢で入院したとき、看護婦が紐で私の顔の縦横を計って「おんなじや」といったことを私は覚えている。

エマーソンだったろうか、「四十にして親譲りの顔をしているのは馬鹿者である」と書いたそうだが、私はエマーソンにほめられてよいのかも知れない。

それに私は小柄とはいえないが、大男ではなかった。官房長官で入洛したとき、恩師や級友が卒業写真を持って来て、

「いつ、そんなに大きくなったのだ。女の子より小さかったじゃないか」と言った。

私は非常に短気で、

「よう喧嘩しなはったわ。丸い顔を真赤にして」

と彼女たちはいう。

もっとも彼女たちは悪童たちに悪戯をされると私に言いつけたそうだ。するとすぐおだてにのって「よし、やったる」といって飛び出したという。私には覚えがないが、この病気はまだ全治していないらしい。

私の母は死ぬ少し前、家内に、

「あの子は表むきは強気で、子供の頃叱ったのでは泣かなかったが、自分の飼っている兎が死んだといって、三日も兎の墓の前で涙ぐんでいたよ」と話したそうだ。

おかげで私の家内に対する威厳は激減した。その兎は旧友のその三人のうちの一人に貰ったものであった。兎は隣家の猫に殺された。私は猫を前の疏水に

投げ込んで仇討をした。

彼女たちのうちに特別大柄な腕力のあるのが一人いたが、小さい私がむやみと喧嘩をしないように、出町橋の乞食（いつも十人位いた）に、無駄な小遣いを投げないように、と私を護衛してくれていたのだそうだ。

当時もよく内閣が変った。加藤高明内閣のことは今でもよく覚えている。すると、学校で先生が新しい大臣の名前を訊ねた。今はどうだかな？たぶん、しないだろう。必ず私だけが全部を知っていてスラスラと答えたそうだ。

彼女たちの言によると、

「実に癪にさわったわ。だけどあの頃から、僕は政治家になる、というてなはった」という。

しかし、これは少し伝説めく話である。

少年の夢

少年期の私の夢は、航海家、探検家になることであった。他の学科は別として、私は地理と歴史は抜群であったつもりである。当時地歴の担当であった上原先生をいまだにはっきり覚えている。

その頃、三条通りの毎日新聞社のホールに「地上」という記録映画がきた。シリヤから出発したフランスのアジア大陸横断探検家の実写だ。これは素晴らしいものであった。トーキーなぞない頃だのに、動物の胃袋を使った筏が急湍を渡るところ、高原の山羊の群、美しい牧歌をきいた思いであった。

この映画が、私に大変な影響を与えた。私はスペン・ヘディンの「大陸横断記」を買ってきた。

その本の訳者は忘れたが難解であった。幾度も読んでいるうちに天山南路、北路のシルク・ロードを進む隊商の夢を見るようになった。その次はステファン・ツヴァイクの「マゼラン伝」だ。この本だけは今でも持っている。この年頃に冒険談や押川春浪を通り越して、割と本格的なものに取り組んだのだから相当オマセであったのだろう。

正確な年月は忘れたが、やがてアムンゼンが来朝した。スコットを南極で破り、続いてノルゲ号で北極を制覇して英姿颯爽たるものであった。映画も持ってきた。

大阪、京都、そして名古屋と、私は大人にまじってこの英雄の話をきいて歩いた。間もなくアムンゼンは、あまりよい弟子でもないノビレ少将救援のため

北極の空に飛び、そして遂に帰らなかった。

その頃、私は文字通りに、探検記、探検家の伝記を耽読した。とくに北西航路ものが好きであった。ほとんどそれは失敗の歴史ではあったが。

しかし、この夢も諦めなければならなくなった。私は探検家や航海家になるための物理、化学、数学が不得手で、かつ好きになれそうもなかったからだ。天文は、星の名前と伝説だけしか覚えられないのだ。これでは仕方がないではないか。夢を捨てるか、嫌な学科に精を出すか、ハムレットや重盛の如くなやんだ末、私は前者を選んだのである。

従って政治家を志したのは、よほど後のことだった。

影響をうけた人

中学は京都府立桃山中学校を卒えた。よく大阪の桃山中学と間違えられる。現在は近くの桃山高等女学校と合併して桃山高校となった。この間、その同窓会の合同式によばれて行ったが、まことに今昔の感にたえなかった。私たちの頃、田中常憲先生という方が校長、質実剛健のスパルタ教育で、ともすれば生やさしくなりがちの京童をきたえ上げていた。ラブレターは無条件退校、情状酌量は全然なしであった。ところが今、その校舎に女学生がいる。まことにこまるではないか。

田中先生は、今日八十余歳、なお元気なもので、入浴の都度お訪ねすると涙を流して喜んで下さる。馬場法務次官も福岡で田中先生の薫陶を受けたのだが、馬場さんの方は私よりもっと直接的であり、かつ田中先生の訓えのとおり進んで今日に至った。しかし、私は田中先生をこの上もなく懐かしく思うし、その影響は今日でも強く残っているのだが、私の青年時代の思想、行動、人間形成は、この田中先生の教育方針と頑固な父に対する反撥が出発点をなしていた。

西欧自由主義への傾倒は先生の皇室中心主義、国家主義への反撥であり、いくらか耽美的な享楽主義は質実剛健に対する抵抗であった。けれども、田中先生の影響は私に根強く残っている。自分でいうのは変であるが、いま世間の人は私が政界に入って以来、一貫して石橋先生とともに歩いて石橋内閣をつくった〈苦節十年〉を認めてくれる。これは田中式教育の成果であった。〈節義〉の二字が私を呪縛してどうにもならなかったのだ。

十二月十四日赤穂浪士討入りの夜、全校生徒を集めて義士祭をやった。詩吟、朗詠、果ては吉田奈良丸の浪花節まであった後、払暁演習に移って、山科の大石良雄別宅で薩摩汁の朝食ということになっていた。この大石良雄の初一念を貫いた行動が魅力であった。これも田中式教育の私の政治行動に与えた影響であったろう。

私の父は、大正の知識階級によく見る自由主義者であった。無論、技術者なのだから思想体系に深さがあるわけはない。しかし、よくデモクラシーを口にした。選挙では必ず憲政会に投票した。憲政会は当時普選運動の中心であったからだ。後年、私が学生運動でときどき検挙されても一言半句小言はいわなかった。しかし、家庭では暴君であった。父が鈴木商店の日比製錬所にいるとき所長であった浅田神戸製鋼社長が、ある雑誌に、父の思い出話を書いておられるのを読んだ。それによると、父はノンビリした男で、浅田さんが仕事のこと

で叱っても糠に釘であったそうだ。私は内づらと外づらのずいぶん違う人であったのだなあ、と奇異の感にたえなかった。この父の暴君ぶりは一つには母への同情と敬愛を深めることとなり、この母が私の女性の理想像となった。私の女性観が古風で、厳しくなったのはそのためである。いま一つは理非を問わず権威と闘ってやろうという困った病癖を植えつけた。例の〈反乱軍時代〉に、吉田さんの中にこの父の姿をみて闘志をわかしたものだ。

ただ、父は正直な、曲ったことは全然できない人であった。父は戦後間もなく六十二歳で世を去った。私の初当選の二カ月前であった。みんな、今少し生かして、私の当選をみせたかったというが、父が生きていれば、私の立候補は父との義絶になったであろう。父は冒険は好まなかった。スペキュレーション（投機）は父への反逆であったからだ。父にとっては、私の立候補は成功率の極めて乏しい投機であったろう。こんな父が突然早死したのは、その正直さの

故であった。あの食糧難ではあったが、米の国秋田の小都市に住んでいて、どうにでもなったのであるが、闇のにおいがすれば一切口にしなかった。五尺三寸、二十七貫の超肥満型が、一、二年で十二貫余となって死んだ。隠れた山口判事事件である。私には、とうてい真似のできないことだけに父を尊敬する。

「配給量は政府が決めたものだ。その量で、人間が衰える筈がない。充分なのだ」この政府への父の信頼感は絶対であった。私はいま議会にいて、どこかに父のような人がいるのを怖れる。

初学年の頃の校長は、熊木捨治という人であった。新潟県人、文部省視学官、早大教授で戦時中物故した。私は早稲田の学生の頃、文学部の前で時折お目にかかった。熊木先生は大正の自由主義者の代表のような人であったと思う。金鎖がチョッキに光り、瀟洒たるものであった。この先生が石橋湛山先生と早大の級友であったことを後年知って、私は驚いたものである。

従って、熊木先生は生徒を自由に伸ばそうとはしたが、「こういう人間に仕上げるのだ」という積極的意図と気魄は殆んどうかがわれなかった。

教育者として、どちらが正しく、よいのであろうか。今の人は疑いもなく、熊木先生をとるであろう。しかし、私は反撥しつつも田中先生の影響を自覚せざるを得ないのである。

はじめ、私は野球部に入った。それは弱いチームであった。勝った記憶は全然ない。田中先生はとうとう野球部を解散し、一年生ばかりのチームをつくって五年目の優勝を目ざした。朝日新聞の夏の大会である。そして五年目、京都の地方予選で準優勝まで進んだことを風の便りにきいた。

野球のためばかりではないが、私はその頃、近所の友人に誘われて、ずるけ遊びや盛り場歩きを覚えた。学業成績は急速に低下し、二年の三学期はその極限に達した。

探検家となることを諦めたのも、この頃であったと思う。しかし、心配したものではない。この私の友人はいま、京都市の温良な公吏になっていて、幾人かの子女のよき父となり、私の入洛のたびに案内役をつとめてくれる。

三年生になって、私は立ち直った。この半分の力は母であった。父は私の成績について、私を叱らず、母をせめた。私は時に矯激な反撥を行うからであった。私は母にすまぬとつくづく考えた。あとの半分は、私の誇りと自尊心であった。私の素質は他の誰よりも優れているという謂れのない自信である。私は秀才に属する三人の友達を求めた。その一人は高木務名君、石原産業に入っている現在セイロンの技術顧問であり、他は三木義雄君三井系商事会社に活躍、いま一人は姫路大学教授小筈美夫君である。

田中式スパルタ教育の華は奈良、桃山間のマラソンであった。もちろん一挙に十里近いところを走らせるのではない。千メートル、二千メートルと距離を

延ばして、卒業までには全員奈良マラソンを走り通すことを理想とした。

私は、奈良女高師のところの出発点と桃山の丘陵にさしかかったあたりは覚えているが、途中は全然記憶にない。下級生に自転車を途中に待たせて、キセルをやったのかも知れぬ。

五年生になると大津の兵営に一週間入営教練を受けた。後日に書かされた感想文に、「こんなことに金を使うより、東北の農民を救い、国民生活を豊かにすることを考えろ」と書いた。東北の饑饉が年中行事になりつつあった。配属将校は私をどなる代りに大真面目に私に議論を仕掛けてきた。満州事変の直前まで軍縮の残火があって軍人の気が弱かったのであろう。しかし教練の点数は途端にガタッと落ちたことは無論である。

この時代、浜口雄幸首相は狙撃されて、ついに逝去し、山本宣治氏は神田の宿舎に暗殺され、その屍が京都に帰ってきた。私は駅頭に迎え、異常な興奮を

禁じ得ないまま、宇治の花家敷までついて行った。帰りに警察に調べられた。そのとき私は右翼に強い反感を覚えた。この反感は今日まで一貫して消えたことはない。

学生消費組合運動

父は私を官学、それも理工科系に入れたがった。無理な話だ。それくらいなら私は探検家の夢を捨てはしないものを——然しこれだけは激しく強制してきた。私は二度高等学校をしくじった。この間、私は伊豆の大島にある藤倉学園に手伝いに行った。精神薄弱児の特殊施設である。あの有名な実践高女生の三原山心中は、私の大島にいる間に起った。それは大変な噂になった。しかし、それまでの大島——ああ帰らぬ昔かなだ。

この経験と知識を基礎に、後年私は中外商業新報にいくつかの読物を書き、

「忘れられた子供たち」と「異常児とその作品」の二著を出すことができた。早大時代から戦前まで余暇を求めてこの問題にとりくみ、資料を集めたが、小石川の家が、私の上海在勤中戦災に遭ってこの資料が灰燼に帰し、以後再び手がける勇気と暇を失ってしまった。

昭和八年、私は島を去り、早稲田大学第二高等学院に入った。

それは、どん底の日本経済が満州事変で次第に息を吹きかえしつつあった頃だ。深刻であった就職難も大陸に吐け口が見つかったので、青年たちは現世的な希望を持ちつつあった。それと、三・一五や四・一六に続いて治安維持法が社会運動に激しく圧力を加えてきた。早稲田大学も学生新聞は廃刊され、雄弁会は解散を命ぜられて、もう学生運動はわずかに学生消費組合の地味な経済活動が残っているばかりであった。それも一、二名の〈常任〉がいるだけで、組合員はつかめもせず、もちろん新しい組合員の獲得は不可能に近かった。配属

将校や学生課員（大部分退役陸海軍将校であったが）は、「学消へ出入りしてはならぬ」と公然と学生に訓示していた。

あるとき大宅壮一氏は、東京新聞の座談会で、

「石田は左翼青年なんだ」

と話しているが、私は顧みてマルクスの信徒になった覚えはない。興味を持ってその著書を読みはじめたことはあるが、難解で根気が続かない。従ってダイジェストで間に合わせた。

しかし、その考え方や体系は私の歯には合わない。私は自由人で反権力的で、そして日常生活はいわゆるプチブル趣味、相当享楽を好んだ。だが、極地探検を志した人たちが極寒、風雪、饑餓、恐ろしい孤独と闘ってつぎつぎに倒れ、それにもかかわらず、たえまなく志を継ぐ人がつづいていった歴史と伝記に熱中したように、私は革命家たちの行動や、その記録を耽読した。氷雪や暴風雨

は憎悪しても仕方がない。ある場合には憧れさえ覚えたが、弾圧をする側には反撥と闘志をわかせた。中学生以来のそれは生理的なものであった。

私が学生消費組合運動に参加し、結局最後の孤塁を守ることになったのも、そもそもの動機は簡単であった。配属将校が学消に近寄ってはならぬといったからなのである。理屈ではこんな運動をすることは中小商店を圧迫することになると考えていたのだ。当時、学消は東大、明大、早大、法政の四支部に分れ、それぞれ店舗を持ち、東大に本部があった。組合長は有馬頼寧伯から賀川豊彦に移った。理事長は戦後数年社会党から立候補した山岸晟君、彼と賀川先生の代理で、杉善君という人が指導に当っていた。共産党系のフラクもあったらしいのである。

組合員がつかめないのだから、組合費は集まらない。従ってわれわれの労力の無償提供によって、一般商店より安い品物を売って学生を引きつけ、やっと

店を維持して行く外はない。私は売上げを持ってよく横山町へ仕入れに通ったが本部の会合へ行くと、こんな風にして経営の成績を上げても、それは〈経営主義〉だといって批判され、組合員の獲得による〈組織〉の拡大が示されなければ顔がきかない。

ところが、早稲田の場合、働く者は〈七高さん〉と私の二人だけ。七高さんというのは鹿児島の人で、多分七高で学生運動をやって退校処分になり、早大に移ってきたのであろう。本名は知らぬ。これは忘れたのではなく訊ねなかったのだ。その上、二人は交互に何かと難癖をつけられて検束された。組合長であった賀川先生は、まるで貰い下げ係のようでもあった。そしていつか七高さんは、学消からも学校からも姿を消して行った。それ以後も幾人か手伝う人が現われたが、長くは続かなかった。

私のまだ行く前、七高さんたちは店の半分を山書店という古本屋に貸し、家

賃の半分を持って貰うとともに留守の場合の店番を頼んでいた。山書店には小柄な人品のよいおばさんと二人の息子がいた。上の息子に女の子がいたが、奥さんはいないようであった。

私が労働大臣に就任して間もなく、山本潔という登録人夫、いわゆるニコヨンの人が、長い手紙と「日雇の歌」という本を送ってくれた。この山本さんが、その上の息子であった。私は早速視察をかねてある日の早朝、玉姫労働出張所（上野公共職業安定所管内）を訪ね、山本さんと二十幾年ぶりの対面をした。彼は、既に白髪の老人となっていた。お母さんは物故し、私たちの可愛がった娘さんは結婚し、彼も第二の結婚をして、私の知らない子供さんと新しい生活を営んでいた。

喫茶店ハイネ

その頃、第何次かの共産党の委員長である岩田義道氏が獄中で死んだ。その後の委員長が実業界で活躍している田中清玄君であったと思う。田中君とはいま親交を続けている。その岩田義道氏の夫人が、早稲田のグラウンド坂上で小さな食堂を開いた。誰だったか忘れたが、私に連絡があり、その店を応援しろということであった。私は一生懸命客引きに熱中し、学校からも警察からもいよいよにらまれるようになった。早大在学中、〈第二無新事件〉で入獄した川添隆行君が出てきて、田中隆治という友人の紹介で会ったのもこの頃であった

ように思う。川添君とはその後音信がなかったが、終戦後新聞放送労働組合が共産党の占領するところとなり、読売争議を契機に遂にゼネストを計画したとき、私はまた例の病気が出て、今度は思い上った押しつけがましい組合幹部に反撃した。抗争半年、大隈講堂で聴濤克巳、鈴木東民君等の追い出しに成功はしたが、然し結局妥協することとなった。現われた新委員長がこの川添隆行君であった。彼は時事通信の記者であった。

岩田夫人はいつの間にか、私たちの知らぬうちに店を閉じ、姿を消した。いろいろな噂が残った。これも戦後、何かの雑誌で夫人の思い出話が出ていたので、早速買ってみたら、その夫人の写真も経歴も年齢も全く違った人で、私は狐につままれたような気がした。

田中隆治という友人にも奇妙な経験を与えられた。誰が彼を紹介したのか、これも忘れた。

彼は早大の先輩で、佐賀県の武雄で当時〈武雄共産党事件〉というのを起し、保釈で出て、公判中であった。決定判決が一年の実刑であったから、事件の名前は少し大げさである。

はじめて田中君に会ったとき、彼は早大正門前の裏通りに二十五、六と二十歳前後の二人の美しい娘とリドーという喫茶店を開いていた。一人は山形県、他は福岡県の人であった。田中君との関係は今日でもなお不明である。名前は忘れた。

刑が確定し、入獄が近づいたとき、田中君は私に、自分が出てくるまでこの二人の娘を預ってくれるように頼んだ。

妙な見込まれ方をしたものだ。現在の私にまだこの種の信用が残っているだろうか。

ところが、同じ頃、私は二つの相談をうけていた。一つは私の保証人である

親類の者が、急に相当の親の遺産を貰った。彼も早大の出身だが、当時金持であった親の仕送りで徒食していた。何かやってみたくて仕方がなかったのだ。

「面白いことをやろう、博英さん」というわけである。

他の一つ、私の住んでいた戸塚一丁目の曙アパート（今はない）の大通りに面した一隅にハイネという喫茶店があった。なかなか繁昌していた美しい店で、その主人がこれはまた京都の府立医大在学中、刑務所に送られる仲間を取り返すため、護送中を襲撃するという勇ましいことをやってのけた男である。

この計画は無論失敗をし、彼も逮捕され、入獄、放校と続いて東京にやってきたのである。それが独学で薬剤師の試験に合格をしたので、郷里に帰って開業をしたが、ハイネを買う人はいないだろうか、というのである。

昭和十年の暮、私は二十一歳の学生でこんな相談を受けたのだから、まあ余程ませていたのだろう。それもまた、私の方で自分の力量、立場を顧みず、相

談はみんな何とかしなければならぬと考えたのだから、オッチョコチョイだ。そして私はこの三つの相談を一つにまとめ、出資者たる保証人に代って私が支配人となり、田中君依頼の二人の娘と前からいた娘さんの三人に働いて貰ってハイネという名前をそのまま開業した。店の権利金は八百円であった。このいま一人の娘さんはブーちゃんというニックネームで、山本安英さんを慕ってきた新劇少女であった。彼女は間もなくやめた。後年この人に上海の北四川路街頭でバッタリ出会った。何と私が訪ねようとしていた先輩の奥さんになっていて、既に二人の母親であったのである。以来今日まで親交を続けるようになった。

当初、店は上々の成績であった。学消とは、その頃私はもう関係がなくなっていて、今度は、当時高田馬場から新橋まで走っていた黄バスに乗って、神楽坂のヴィクトリアというロシアケーキの店へ仕入れに通った。一個七銭で仕入

れたのを十銭に売るのである。飲物は大体半分儲かった。満員でお客をただ帰すのが惜しくて仕様がなかった。賀川先生や秋田雨雀氏も来た。それに早稲田の先生たちが、まさか学生である私が主人公とは知らず、よいお客であったし、その中には友人も勿論いたが、学生たちは例の娘さんたちをハリに来るのがすこぶる面白かった。

片恋の断髪少女

ところが大異変が起きた。開店七、八カ月経った十一年の初夏であったと思う。田中君が出獄して上京し、曙アパートに部屋を借りると共に、「どうも有難う。これから自分が養うから二人は店をやめさせてもらう」というのである。

何とも私は、腹が立つより前に唖然とし、それから全く困却した。しかし、田中君の掛け合いはなかなか厳重であったし、二人の娘も田中君に同意なのである。

以来二十年、私はよくこれに似た羽目におちる。とくに婦人相手の場合に多

い。私に、何処かに一本抜けたところがあるのか、身の不徳のいたすところか、オッチョコチョイだから利用するだけしてやれというのか、今となると自分でもいくらかその原因がわかるようでもある。

出資者たる保証人の手前、私まで投げ出すわけにはいかない。新しく美人を集めて店を拡張し鼻をあかしてやらねばならない。臨時に行きつけのおでんや江戸ッ子のみっちゃんという娘に手伝ってもらっている間に夏休みになった。この店江戸ッ子は、今でも高田馬場のもとの所にあって、時折一杯やりに行く。林譲治さんもひいきにしてくれている。田中君は、私が石橋内閣の官房長官になったとき、首相官邸にお祝いにきてくれた。既に二十年、ただ懐かしさが残るだけであった。

夏休み中に二階をすっかり店に改造した。収容力は倍になった。店員も量質とも満足ではなかったけれど揃った。それまで店員の寝室であった二階を店に

したのであるから、新たに二階建の一軒を借り、郷里の大館から鳴海というおばさんを傭って家事をまかせ、二階に私が住んで階下を店員の宿舎にした。先年物故した早大教授松尾隆氏を弔問したら、彼の家がこの私の借家であったのである。ところが大番狂わせが起った。第一、改造の結果、店の雰囲気がまるで変ってしまったのである。ハイネの著書を集め、ドイツの絵画を飾ってはみたが、どうもいけない。今度は店の収容力の方が客を上廻り、経費が嵩み過ぎるのである。これは水商売をする人にはよい教訓であろう。すぐ客でつまる位が良いのである。次に店員である女性が、まるで変ってしまったこともいけなかった。秋が訪れるとともに成績は急に悪くなった。

それに女店員の一人が店をやめ、今度は客となってきて、睡眠薬を飲んで自殺をはかった。未遂ではあったが、遺書をもっていた。それが何と私に恋をして一向に反応がないので店をやめたが、なお諦められぬので、店へ来て未完成

交響楽を聴きながら死を求めたというのである。これが、当時の時事新聞に、〈恋の未完成を嘆き、断髪少女毒をあおる〉という見出しで派手にかかれた。私にとってこんな恐縮な経験は後にも先にもない。一向に自覚しなかったのだから、もったいない話というべきであろう。しかし、この事件は落ち目の店をいよいよ悪くした。そして間もなく、私がこの店と別れなければならない新しい事件ができた。

その新しい事件を語る前に、私は学生としての生活を、昭和九年頃に戻してみなければならない。

〈学生消費組合〉の経営は相変らず苦しかったが、この店を中心にいろんな意欲的な友人を持つことができた。当時「二十歳にしてマルクスボーイにならぬ者、三十歳で依然マルクスボーイたる者、両方とも、どうかしている」といわれた時代だ。みんないわゆる〈進歩的学生〉であった。芥川賞を貰った辻亮一君、それに八木義徳君、中村八朗君、黒沢映画のプロデューサー本木荘一郎君、それから名優森繁久弥君も同期生である。比較的文科の方が名をなしているが、政経、法科も相当人材がいた。しかし、まだ名をなすには早い。

早大の秋の文化祭に私たちも〈さまよえるユダヤ人〉という劇を出した。ナチスのユダヤ人迫害が世界の話題となっていた。この劇は帝政ロシアのユダヤ人に対する宗教的迫害を描いたものであった。私は息子の改宗に絶望する頑固な老ユダヤ人になった。主人公であった。ところがクライマックスの、改宗した息子を殺そうとして短刀を振り上げたところをロシア官憲に押えられるその瞬間、何と私の手の短刀が官憲の手に押えられてカツラの毛にひっかかり、白髪がとれて黒髪となってしまった。観客である学生はそんな珍事が起きなくとも笑おうとしているのであるから、もちろんドッときた。私はどうしようと思ったが、中止するわけにもいかず、終りまでやった。演技は一向話題にならなかったが、悪びれずに幕まで続けたことだけ無闇とほめられた。

私は二年続けてクラス委員をやった。私の委員を学生課では喜ばなかったが、選挙だから仕方がない。

その頃の悪友は草野邦輔君といって私が大島から帰って一時京都の予備校に入って以来の友人で、ずいぶん悪所へ案内された。いま漁船の船主となって北洋に活躍している。

一年に一回宛、軍事教練のため数日間廠舎に宿営する習わしがあった。第一年は御殿場である。暑い頃であり、私は友人と示し合わせて仮病を使うことにした。私が脳貧血で倒れ、その友人が看病のため残るというのである。

これは成功した。その友人は安川君といって、いま丸紅飯田の中堅幹部である。あの腕前なら相当の実業家になるであろうと今思っている。

第二年目は千葉の一宮であった。この時私は隣の組のクラス委員である渡部克巳君（現在早大社会教育課長）とともに、内務主任という風紀係をおおせつ

かった。およそ見当違いの人事である。その夜、夜間演習があって私は防備軍の指揮者になった。しかし、友人たちは空砲を撃てば後で掃除が大変だから、撃たすなという。私は大衆の声を尊重して、白兵敵を撃退すると称して最後まで沈黙した。配属将校は奇妙な顔をしていたが、「悪い作戦ではない」という講評であった。そしてみんな寝かせた後、渡部と私はこそっと抜け出して、近くのヨシズ張りの店へ出かけた。新鮮なイワシを肴に飲む酒は甘露であった。ところが途中で渡部が便所に出掛けたまま帰ってこない。待ちあぐねて、

「オイ、渡部」

と大声を発すると、

「オウ」

と這入ってきたのはワタナベでも、何と配属将校の渡辺大佐であった。馬占山という綽名である。渡部は便所の帰りに馬占山の姿を見て私を捨

て、身の安全をはかったのである。似た話を小学校の教科書で読んだことがある。万事休す。前年の仮病も白兵敵を待つ名作戦も一切が悪意にとられ、それに日頃の行動も加わって教練は完全に不合格、徴兵検査と点呼では憲兵になぐられ、召集のたびにエライ目に合うことになった。私は四度兵営の門をくぐり、全部即日帰郷になったが、一度は現役入隊であった。

それで私は、御丁寧に徴兵検査を二度うけた。渡部はめでたく、ついに陸軍大尉まで昇進した。正直者は馬鹿をみる。

もっとも、教練不合格はこの事がなくても当然であったろう。昭和九年には東京市電の最後の大争議があった。先年物故した社会党代議士熊木君が委員長であった。これを手伝って私は、検束を受けた。しかし、短期間であったので学校では叱りおく程度であった。この少し前から私は本木荘一郎君らと〈火曜会〉という社会問題研究会をつくった。指導教授は京口元吉氏と故矢口達氏で

あった。石橋内閣をつくる時われわれは矢張り〈火曜会〉という議員の団体をつくった。火曜日に集まったためである。この研究会が段々大きくなって、いろんな方面と連絡がつきはじめ、ついに昭和十年正月早々一斉に淀橋警察署に検挙され、二月に私は発病して慶応病院に送られた。このとき入江たか子さんが隣室に入院していることを看護婦の話できいた。

当然私の処分が問題になった。学生課方面は退学処分を主張した。ようやく静かになった学園を間断なく騒がす者というわけだ。学生課長は現在自民党代議士中島太郎氏であった。

このとき私を救ってくれたのが現在早大教育学部長の竹野長次先生であった。私は進級試験を受けられない程度の停学で済んだ。石橋内閣の組閣が終って閣員を宮中に認証式で送り出し、私は官房長官室に帰って直ちに竹野先生に電話して往年の厚誼を謝した。あの時、放校されていたらどうなったであろうか。

竹野先生は涙声で喜んで下さった。今でも早稲田で学生処分が問題になるとき、私のことが引き合いに出されるそうだ。

私は警察から常時監視されることとなり、学消へ顔を出さぬ方がどちらのためにもよいこととなり、ハイネの経営にでも熱中するほかやり場がなかったのだ。学消は間もなく閉店した。そして早稲田の同級会が二つできることになったのである。

以後、私は二度警察に連れて行かれた。二度とも全く身に覚えのないことであった。その一度がハイネが左前になってきた昭和十一年の晩秋であった。この拘留で私はかなり身体を悪くしはじめた。

青春の終り

前に、私が喫茶店のハイネをやめなければならぬ事件が起ったと書いた。その事件について語らなければならないが、私の娘が満十八歳と十六歳になっていて、もし本書を読むと困るから今回は勘忍してもらいたい。もしではない。必ず読むであろう。

娘たちは、既に自分では充分大人だと思っていて、父である私の青春時代について興味をもっているからである。その事件は彼女たちにとって教育上あまりよろしくない。オヤジとしての威信に関するだろう。

学部へ進んで私は次第に健康を害してきた。それに新しいクラスにはどうも馴染めない。学校へは遠ざかり、アパートで手当り次第乱読に時をうつすことが多くなった。

いま政経学部長をしている吉村正博士がその頃、欧米留学から帰朝したばかりの新進の助教授であった。その行政学の講義をききにいった。私は和服に二重マントを着て最前列に坐り、熱心に聴講した。

いつも、私は決してノートをとらなかった。それは適当な時にプリントになって売り出されるからである。ところが講義が済んで帰るとき、吉村助教授は、私に、

「君、及第点をあげるから、この次からこないでくれないか」

と聴講を拒否された。今日になって、先生の説明によると、

「何しろ、身体の大きいマセた奴がドテラで、何をいうかという顔をして、ノートもとらずニヤニヤされるのには弱ったよ」

ということである。

しかし、吉村先生とはこれを契機に、今日まで極めて昵懇に願っている。その頃、三木武夫君は満三十歳で立候補して当選した。私は吉村先生がヨーロッパで三木君と知り合った縁故で、先生と一緒に一ヵ月、徳島に応援に出かけた。父のフロックコートを借用して、学生であるなどとはおくびにも出さないで。

だから三木君との交遊は三十年に余る。彼は、「俺が石田の選挙の手ほどきをしてやったのだ」という。私は、「われわれが当選させたのだ」と逆襲する。しかし、代議士になるには私は、「金と地盤がなければどうにもならぬ」と思い込んでいたのが、「これなら私にでもやれるぞ」という自信を得たのは、確かに三木君のお蔭であった。この二人の由縁が石橋内閣をつくる原動力となったのである。

また、この年、昭和十一年の新学期から、私は東京外国語学校の露語専修科に通うこととなった。午後四時から七時までだ。二年間通ったがもう忘れた。その頃、今の横浜国立大学教授小林高四郎君という良友を得た。

十二年の秋になって私は非常に疲労し易くなった。医師は左側肺浸潤と診断し、私は牛込のアパートを引き払って鎌倉に療養することになった。学校は卒業するのにさしつかえぬ程度に通った。

牛込のアパートで、日華事変に出征する軍靴の音をきいた。だが、この時代の波が自分にも及んでくるとはまだ考えなかった。夏の夜の神楽坂の散策は、まだよき時代の下町の面影を残して楽しかった。

年が明けると鎌倉の療養の効果がめきめき現われてきた。その頃すぐ下の弟が米国から帰って私と同じ病に倒れ、二人揃って仙台の熊谷博士の診断を受けに行った。この弟は七年臥床し、こんな医師の指図に従順な患者はない、と誉められながら死んだ。私は盗み酒をして叱られながら十三年の秋には健康を恢復し、十月に結婚をして、そのまま鎌倉の由ガ浜の旅館の一室で世帯を持った。鎌倉の療養生活を今から思えばかえって楽しいものであった。子供が毎日集まってきて幼稚園のようであった。中には、

「石田さん、買物に行くから、この子を預かってよ」

と乳児を置いて行く奥さんもあった。この子供たちの一人が昨年結婚をし、いま母となっている。結婚式には出席をして祝辞をのべた。

翌十四年どうやら早稲田を卒業して中外商業新報社に入社した。こんな経歴の私をあの難しい試験の中から採用してもらえたのは、竹野教授と上井磯吉教授、それに同社の社長の田中都吉氏、編輯局長小汀利得氏のおかげである。

かくて、私の青春は終った。

抵抗の旗手

この一番

私は昭和十八年十月から終戦まで、日本経済新聞社の上海支局長を勤めていた。太平洋戦争の様相は、昭和二十年一月ごろからだいぶ悪くなっていた。その新聞社の上海支局ははじめ虹口にあったのだが、当時は共同祖界へ移って、堂々たる敵産の建物に入っていた。

二十年に入ると日本の敗色濃厚となった。日本が敗けて敵軍に占領されるようなことになったら、上海にいるわれわれ日本人は、一体、どういうことになるだろう？私は終戦の年の一月に早くもそういうことを考えていた。

おそらく無血占領ということになるだろう、そうなったら、上海に住んでいる日本人は収入が皆無になるから、支局で雇っている使用人の給料や手当も払うことができなくなるにちがいない。そんなことになったら大変だ、ここは一番、思案のしどころ、度胸のきめどころとおもったので、戦争に敗けて無一物になる前に、支局の財産を処分して使用人には手当を渡して解雇し、身軽になっておくに限ると判断を下した。

そこで、昭和二十年三月、本社の指示をまたず独断で支局の財産を当時の上海ドルで百五十万ドル位に処分して、支局を閉鎖してしまった。もっとも仕事の方は共同通信の一本になっていたので、どっちみち支局としての機能は発揮できない時局だった。

私の思い切った処置に、各社の支局長連中も無茶な奴だと驚いていたようである。この建物を買ってくれたのは、日本人で早大の先輩だった。私が支局の

財産を処分したいということをこの先輩にもらすと、それなら是非俺に売ってくれという。しかし私にしてみれば、敗戦になったらすぐ取上げられる財産を、承知の上で先輩に売るわけにはいかない。

先輩はどうしても売れという、日本は敗けるのだから買うことはやめた方がよいとは、当時の情勢として私の口からはいえない。とうとうその先輩に売ることにしたが、結局私の予期した通りになった。

相手は別にそんなことをおもっていないようであるが、私としてはなんとしても寝ざめが悪い。日本に帰ってからも、その先輩とは、二、三年に一度位会って、互に思い出を語って旧交をあたためている。

人生には常にバクチがついてまわる。自分ではバクチのつもりでなくても、他人からはバクチに見える場合もある。

上海でとった私の措置は、他人からは大きなバクチに見えたかもしれないが、

私としてはバクチでもなんでもなかった。私は身軽になっただけでなく、上海に借金を一つも残さずに引揚げてきた。おそらく各社の人たちで借金を残さずに帰ることのできたのは私一人であるまいかと思う。

社には相談しないで処分はしたけれど、結果的には、社に対して少しも迷惑をかけずにすませたのである。

こうした措置をとることができたのは、私は常々、軍事史を興味をもって研究していた。特に第一次大戦で連合軍が独軍の占領地を接収した状況を参考にして私の考えを割り出したのである。

もしもこの時、私の見通しが違っていて、日本が敗けていなかったら、私は会社を追い出されていたであろう。

これが終戦直前、私の人生で最初の大勝負ともいうべき出来ごとであった。

二度目のこの一番は、昭和二十一年第一次吉田内閣のときである。当時私は日本経済新聞の首相官邸詰のキャップをやっていた。

五月十九日午後零時半ごろである。「米よこせ」デモの一隊百五十余名が徳田球一、鈴木東民君らを先頭にアカハタの歌をうたいながら首相官邸に押寄せてきた。

官邸記者室から飛び出してみると、一隊は「保守反動政府絶対反対、民主人民政府をつくろう」というプラカードを押したてて官邸内に侵入した。

この時の書記官長林譲治さんの態度は実に立派だった。共産党の猛者に身辺を十重、二十重に取りまかれたなかで、泰然自若として数時間にわたって沈黙戦術をとった。

私は見るに見かねて、例の気性でムラムラと闘魂を燃やし、林さんを救出しようと包囲する共産党の中に割って入り、徳田、鈴木らと渡り合った。

共産党員の座りこみ戦術は、いつ退散するとも見当がつかない。林書記官長は依然として沈黙である。

陽はとっぷり暮れて夜になった。官邸詰の記者連中も腹がへってきた。そこで私は官邸の食堂をぶらりのぞいてみたところ、そこにたきたてのうまそうな握り飯が山ほど用意されていた。

私は意外に思ったが、そしらぬ顔で、

「これはどこに持って行くのか」

と、食堂の係りのものに聞いてみたところが、

「記者クラブの人たちに出すのです」

という。そのうちに、その握り飯はなんと座りこみの共産党員のところへ届けられてゆくではないか。

これには、われわれ一同がカンカンに怒った。

誰が共産党に握り飯を渡したと詮議すると、読売新聞の官邸詰記者の中に、当時読売新聞編集局長をしていた鈴木東民君の息のかかった記者がいて、官邸詰の記者団に炊きだしをやるからと偽って、事務所と交渉し共産党に持っていったことがわかった。

そこで記者団は直ちにその記者を除名処分したのだ。これが読売新聞における馬場恒吾氏擡頭のキッカケとなった。

新聞放送労働組合は、既に共産党の手中にあって、読売新聞社の争議を契機にゼネストを計画した。

私は、事情を知らぬ総司令部の新聞課長のインポーデ氏と度々話し合い遂に諒解を得た。

読売の馬場さんは、共産党員の処分を開始した。私は社会党池田貞治君（当時読売官邸詰記者）らと手を握って「新聞放送記者連盟」をつくった。

その連盟誕生にはタバコとビールの特配という手を使ったので、参加者は忽ち集まって共同通信の宮本君（当時共同の官邸長）が専務理事になった。かくて、京橋公会堂で読売問題に関する新聞労組代議員会が開かれ、私と池田君が演壇に立って、共産党の闘士を向うにまわしてぶちまくった。

抗争半年、大隈講堂で聴濤克巳、鈴木東民君らの追い出しに成功した。然し私のこうした共産党との戦いも、新聞社としては迷惑だったらしい。

私が毎日乗り廻していた新聞社の運転手が共産党の廻しものだった。私は全然気づかなかったが、私の行動を細大もらさず共産党の方へ報告していたのだった。そして最後には大隈講堂の大会で、私の毎日の行動を細大もらさずすっぱぬいた。私は新聞社に対してその運転手を解雇するように迫ったが、新聞社では、「まァまァ」と私をなだめて、その運転手を解雇しようとはしなかった。

私が政治家を志し、代議士立候補の決意をしたのは、この前後のことである。

私は上海から帰った当時、郷里秋田県の各所で依頼されるままに講演をして歩いたことがある。それが縁となって故郷に知友を得た。

昭和二十二年一月十二日に私の父は他界したので、帰郷して葬儀万端をすませた上、田舎の家でぶらぶらしていると、友人知己が集まって、

「石田さんを代議士に出そうじゃないか」

という話が出た。そして、私に出馬しないかと持ちかけてきた。

「よろしい、出ましょう」

というわけで、立候補の名乗りをあげた。選挙戦は順調に戦って初陣ながら当選した。そして今日まで当選六回、私は選挙を水もののバクチとは思っていない。

かくて、私の度胸だめしの例の〈反乱軍事件〉なるものが、まきおこったのである。

それは、昭和二十七年第三次吉田内閣の時である。私は衆議院の議院運営委員長をしていた。一体、私自身にしてみれば、いわゆる吉田側近から冷遇されていたとはおもわなかった。しかし、私の尊敬する石橋湛山先生追放のイキサツには不満を禁じ得なかった。そして、私は強い憤りを感じて、

「石橋先生を一度世に出そう」

と、心に念じた。これが反乱軍の発端となった最大なもので、もう一つは、吉田首相の暴君ぶりに対する反感である。吉田さんはどこか私の父親に似た性格がある。それがなんとなく私の疳にさわった。そして、吉田さんが福永健司君を自由党幹事長の候補に挙げたときに遂に爆発した。

議運委員長だった私の部屋には、倉石国会対策委員長はじめ、福田篤泰、佐々木秀世君などの面々が集まって気勢をあげた。

総裁と決戦

反福永派の勢力は次第に結集され、吉田首相がもし福永幹事長案をひっこめなければ、私は大詰めになった第十三国会で七十余の重要法案を流してしまう腹をきめた。

険悪な空気に林、益谷、大屋、植原、大野、星島、田中の七長老は、七月三十日長老会議を開いて、福永氏を辞退させると同時に林さんの幹事長就任を懇請する運びとなった。

その翌日、七月三十一日、じっとしていても汗のにじみでる真夏の暑い日だ

った。私は委員長席で七十余の法案を手にして、ノラリクラリ周囲の形勢を眺めていた。重要法案を通すか握りつぶすか、——活殺与奪の権は私の掌中にあるのだ。このときの私の胸中はなんともいえなかった。

然し勝負はきまったのだ。吉田首相は福永君をひっこめて、林さんが幹事長となったのだ。私は夜中の十一時過ぎ会期延長を決めて法案を通過させた。世間を騒がせた〈反乱軍〉事件も幕となった。

私は前にも述べたように石橋湛山先生の人物に惚れこんでいた。石橋先生は第一次吉田内閣の蔵相のとき追放になった。そして、芝三田の蔵相官邸をひきあげた。このとき、料亭の桂で夕食会を催した。そのとき同志と見られる人々が三十数人あったのに、集まって来たのは、島村一郎、高橋英吉両君と私のたった三人だった。

人情のうすい世の中に、義憤を感じて意地でも、石橋先生をぜひ世に出そうと決心したのである。

春風秋雨、苦節十年——石橋先生の総裁運動に乗りだした。これがまた私の人生にとっての一つの大きな山となった。

石橋内閣をつくる原動力となった三木武夫君とは、早稲田の吉村先生がヨーロッパで三木君と知り合った縁故で、先生と一緒に一カ月徳島に応援に出かけたことがある。それはまだ私が早稲田の学生の頃で、父のフロックコートを借用して、学生であることなどは、おくびにも出さないで、各所で応援演説をやった。

三木君は満三十歳で立候補し、当選して以来すでに回を重ねること九回に及んでいる。そんな次第で三木君との交遊は二十年に余る。

「俺が石田の選挙の手ほどきをしてやったのだ」

と彼はよくいうが、私は私で、

「私たちが当選させたのだ」

と逆襲する。

その三木君が、

「おいッ、石橋さんをやろうぜ！」

と私の手をしっかり握ってくれた。

昭和三十一年十二月十四日、東京都千代田区大手町産経ホールで自民党の後継総裁を決める第三回自民党大会が開かれた。

岸、石橋、石井三候補が総裁の椅子を争ったのである。世界の眼は日本の保主党の総裁の椅子が誰の手に落ちるか注目していた。

第一回の投票は、岸信介氏が二百二十三票、石橋湛山氏が百五十一票、石井

光次郎氏が百三十七票であった。

いずれも過半数とならず、第二回目に決選投票が行われた。

第一回では岸氏と石橋氏の間に七十二票の差があった。ところが決選投票の結果は、石橋湛山氏が二百五十八票、岸信介氏が二百五十一票で、投票数五百十票、無効一票、棄権一票であった。そして石橋先生に総裁の栄冠は輝いたのである。

一代の芝居

このときのハラハラした内幕をのべよう。第一回の投票が終ったとき、私の顔色が蒼白になっていたと評する人がいた。事実、私は石橋先生をかついでいたから、結果如何については人知れぬ心痛があった。

ところで、決選投票の開票にあたって、投票用紙を整理するところを、よく見ていると、岸派の投票用紙の中にも二つに折り曲げられたものが多い。何か約束の印のようでもある。そして、幾人か私の永い友人が、私の前を顔をそむけて通った。さて集計の結果は、岸派が二百五十一票、石橋派が二百五

十票である。

ちっとやそっとで驚かない私もこの票数には思わず知らずドキンとした。ところが、選挙管理委員の井出一太郎君が、手をブルブルふるわせているではないか——ふるえる手の中には投票用紙がまだ握られている。

私はハッとした。

「君、その手の中に何票あるのか」

「八票ある」

まったく息づまる一瞬だった。

胸中「しめたッ」とおもった。誰かから、なにやら無効だというような声が起った。しかし、それも一、二票のことで開票結果にひびくものではないと安心した。

私の心臓の鼓動は次第に冷静になった。そこで、おもむろに議長席の砂田重

政氏のところへ足を運んだ。

砂田議長の耳もとで、

「この際、ちょっと休憩したらどうです」

私のこのささやきを聞いて、砂田氏はおそらく、石田が休憩を持ち出すようでは、石橋が負けたに違いないと直感したらしい。それで反駁するように、

「休憩はしない」

と、その場で断言した。

私はこの一言を聞いてホッとした。あの場合、休憩していたら後継総裁の椅子はどうなっていたかわからない。

もしも、岸派が敗けたことを砂田氏がさきに知っていたら、砂田氏の方から休憩するといいだしたことだろうと思う。

砂田氏が「休憩しない」と断言したとき、私はこれで宿願の石橋総裁は決った

と思った。

この選挙は、私にとって一生一代の大芝居であった。

七票差の逆転勝ちとなった石橋内閣は、昭和三十一年十二月二十三日に成立し、超えて翌三十二年一月二十三日午前一時二十分には石橋首相が病気のため、岸臨時代理と三木幹事長宛書簡を送ってあっさり退陣した。

この石橋先生のあっさり辞表を投げだしたことが、一般の意表をついて、今更ながら国民は石橋先生を見直した。大向うはやんやの喝采だった。いままで総理大臣のポストは誰にしろ、そう易々と投げだしたものはない。これが政界の普通の常識となっていた。

石橋先生の場合は、側近者の間には予算審議の途中で、無理をしても二日か三日登院させて、それで予算を成立させた上、ゆっくり静養させるという方法

を考えているものもないではなかったが、それを斥けられた石橋先生の態度は立派だった。

一月二十二日、四人の医師の立合診断で病状がハッキリすると、自分で退陣を決意した。それを岸さんと三木君に宛てた書簡の形式で明らかにしたことも、いままでの内閣でどの総理大臣もやらなかったことである。

書簡の一節で石橋先生は、

「私は新内閣の首相として最も重要なる予算審議に一日も出席できないことが明らかになった以上は、首相としての進退を決すべきものと考えました。私の政治的良心に従います」

と述べている。その書簡の草案を誰がつくったか、それは、官房長官だった私の口からはいえない。

私は書簡発表を終って、日活会館に引揚げてウィスキーをぐっとのみほして

ベッドにもぐりこんだ。

翌日の朝、電話のベルで眼がさめた。相手は広川弘禅君である。私は電話に出る前に、新聞を開いてみた。どの新聞も石橋先生の退陣を讃えている。私は、

「ああ、これでよかった」と思った。

電話口に出ると広川君が、

「あれでよかった、君も身体を大切にしろよ」

私は涙がこみあげてきて、受話器を握ったまま、ベッドの中でわっと泣き伏した。三十余年ぶりで声を立てて男泣きに泣いた。その泣き声を広川君に聞かれてしまった。今考えても恥かしいような気もする。

私は石橋先生について十年、身命を投げうって働いた。

書簡の発表を終った後で、石橋先生は、

「君、なにごとも運命だよ」

といわれた。そして、

「ご苦労、ありがとう」

先生が私にこういう言葉をかけてくれたのは、このときが一度っきりである。

私はなんだか悲しくなった。

宰相の良識

湛山の魅力

私が石橋さんという人にほんとうに身近くいろいろお教えをいただくようになったのは、石橋さんが十年前（昭和二十二年）に追放になってからである。それまでは深いおつき合いはなかった。戦後二十二年、私がはじめて衆議院に立候補するとき、小汀利得氏――私はそのころ、日本経済の社長であった小汀さんに仕えていて、その小汀さんからご紹介されたのがお近づきとなった動機であるが、先生が追放になるまでは別にこれということはなかった。

では身近に先生にお仕えするようになるまえの石橋湛山というものを、私は

一体、どういうふうに見ていたかというと、まず第一に、先生は、あの当時の軍閥、官僚の言論統制下にあって、一貫して自由主義の立場を貫き通していた。その間、たとえば雑誌の編集においても、いま回顧してみて、歯の浮くような、あるいは後悔するような追従のあとが全く見られない。今日、いわゆる進歩的学者とか評論家とかという連中の多くが、その当時どういうことを書き、どういうことを言っていたか、それから、言論界——当時の雑誌、新聞、出版というようなものが、どれだけ当時の軍部などに追従していたか、それらと比較してみると、石橋先生の戦中、戦後を貫いてこられた行動は、非常に立派なものであったということがわかると思う、これが、私が外から見ていて、石橋という人に敬服していた第一の点であった。

私は学生時代から、まあ今日までも左翼——当時は左翼学生と言われたけれども、私は左翼学生であったつもりはないので、いわばその当時の軍閥や官僚

の言論弾圧、それから学問や、いろいろな社会運動なんかに対する弾圧に対して、反感をもっていたというだけのことなのだが、そういう意味でやはり一人の自由主義者だった私は、そういう思想的なバックボーンというものについて、当時から先生をそれこそ名峰のごとく感じていた。

それから第二には、第一次吉田内閣（昭和二十一年）の大蔵大臣であった石橋湛山先生に非常に憧憬を感じた。というのは、さっきもちょっと述べたとおり、戦争中は軍閥の先走りをしていた連中が、こんどは戦争が終ると、掌をかえすように、まったく二とおりになった。一つは、急激に左翼化して時流に便乗し、もう一つは、アメリカに追従してアメリカの言うとおりになるという工合に、実にわが国、上下をあげ醜態をさらけだした。いかに日本人が力というものに、弱いものであるかということを示したものであるが、それについて、

私は非常ににがにがしい感じをもっていた。そこに石橋先生が第一次吉田内閣の大蔵大臣としてあらわれた。そしてそれはまことに毅然颯爽たるものがあった。先生は自ら正しいと信ずることに対しては、いささかも譲らず、然も占領されている敗戦国の大蔵大臣でありながら、常に日米関係の将来のことを考え、それからアメリカのためにも、自分の主張が正しいんだ——つまり被占領国の国民でありながら、占領しているアメリカ軍のためにもものを考えるという大乗的見地から万事を主張するというその高さ、強さというものに、私は非常な憧憬を感じたのである。いまでも私が覚えているのは、当時はまだ旧帝国議会のころで、全員協議会があった。その全員協議会で、たしか戦時補償の打切り問題であったと思うが、それについて米軍当局と折衝した経過を蔵相として先生が語られたことがある。そのとき、ほとんど与野党を問わず、当時全くの反対党であった共産党の徳田球一君までもが涙を流すくらいの感激を味わった。

このときの先生は正に憂国の士の熱と涙があった。

それから大蔵大臣の末期に、当時の終戦処理費のなかに、日本国民は文字どおり食うや食わずで、汽車、電車等どの乗りものにしても、たいへんな混雑で、乗客が機関車の上に乗ってまで走った状態のさなかに、米軍のための特別列車、米本国から来る米兵の家族の為のいろいろな近代的な施設——ゴルフ場の建設とか生鮮野菜用の大温室など、そういう当時の日本の実情としては、またいくら負けた国といいながら、当時の日本の立場を考えたならば、贅沢きわまる要求を盛ったその処理費を、先生は蔵相としてこれを言下に削除して、六十億だったか六十二億だったか、数字はちょっと忘れたが、最後にはとうとうマックアーサー司令官のところまで行って、ついにその目的を達成した。被占領国をあまり困らせることは米国の占領政策の将来に決してよい結果をもたらさないぞ、というのが先生の相手の立場まで考えての趣旨なのであったが。しかしこ

のことが逆にとられて、石橋というやつは扱いにくいと当時のアメリカ軍首脳部に思われたのが、あの理由をなさない追放の大きな原因となった。

こうした石橋さんが、とうとう追放されるという直前、追放いよいよ確定というときに、私は先生をお訪ねした。すると先生は悠然としていて、

「おれは世界にいささか聞えた自由主義者だ。おれが戦争協力者として追放されることがあるもんか」

と心配なんか全然していない。自己の信念に、いささかも疑いをもっていない。私は自分の持っている情報で、事態は非常に悪いということを知っていたけれども、その信念の前には何も言えないくらい確固不動の態度だった。これ

は情報を知らないといえば知らない、気を使わないといえば使わないということになるが、そんなことにコセコセしないところ、やはり石橋湛山という人は偉い人で、このことは同時に、石橋さんが自ら顧みて、いささかも思想上、あるいは言論および政治行動上、恥ずべきことがなかったということを物語っていると思う。

ところでいよいよ追放がきまった。まあ先生は、六十二億円というものの国費——数字はちょっと違うかもしれないが、それが先生によって救われたのですから、まあ残念でしょうがこのところは我慢をして、再起を期するんですな、と慰めの言葉に、私はそんな事を言ったように思う。そうすると先生は、

「いや、おれ一人のことはどうでもいいんだ。これからの戦時補償の打切りその他でも、あとに続いてくる大蔵大臣が、おれと同じような態度をとるんだ。そうするとまた追放になるだろう、しかしまあ二、三年それを続けてやれば、

米軍当局も反省するだろう」

と言われた。ところが残念ながら次にあらわれた大蔵大臣は、すぐ米軍の要求に屈伏してしまった。

それからもう一つ、愚痴というものを、その間にひと言も先生から聞いたことがなかった。私は今日まで十何年、それこそ親子のようにしてきたが、先生の愚痴はいまだに一つも聞いたことがない。いわゆる〈自ら正しくんば千万人といえどもなお行かん〉で、人がなんと言おうとも、自分が顧みて恥ずべきことではないんだ、という当時の毅然たる態度というものは、いまでも私の脳裡にはっきりときざまれている。あちらこちらの顔色を見て、身の安全をはかるということは、先生の考えるところのものではなかった。それはあのときは、もっと動きようはあった、動きようはあったし、それからうまく動いてさえいれば、当時自由党内には先生への人望が翕然として集まりつつある時代であっ

たから、あるいはもっと早い時代に石橋内閣というものはできたかもしれない。だが石橋湛山という人が、あのころ変な姑息な了解工作をしないでいたところに、かえって生涯を飾るものがあったと私は思う。

さて、追放になられてからの先生は、最初、神田の駿河台の目黒書店の四階に事務所を構えられた。自由協会の看板もあった。その頃、その事務所には私はちょいちょいお伺いした。ところがそのころには、特審局というものがあって、追放者の政治行動を監視する連中がおり、その連中が、私がその先生の事務所に一週間に何回くらい行くとか、一日どのくらいいたとか、そういったことをいろいろ調べては、その調書に私に判を押せという。私は空とぼけて、

「どのくらい来たかといったって、毎日かもしれないし、そんなことを君、おれは帳面にいちいち書いて先生のところへ行くわけがないじゃないか」

と言って白ばっくれていたりした。

そのころは、先生は追放で体にお暇ができたから、よく銀座裏のバーや、おでん屋などにお供をして、一緒に飲み歩いた。だから私の個人的な気持から言えば、その時代がいちばん楽しかったような気がする。先生と一緒に十和田湖に出かけたり、また私の秋田の家へも二度ばかり来てもらったこともあった。

しかしその間を通じて、いつになったら追放が解けるかわからない。全く五里霧中のとき、それにもかかわらず、やはり黙々と勉強を怠らなかったということ、そして時代の動きというものを実に正しくキャッチして、しかも記憶はいささかも衰えていない、これは私は立派なものだと思った。追放中は、いろいろな政治家のうちで、いちばん石橋先生が平常と少しも変らなかった。前の面影をそのまま残しておられた。只そのとき非常に不愉快でいやだったことは、それまでに石橋先生に世話になった人はずいぶんいた。しかし先生が追放にな

ったらほとんど行くものがない。はじめのころは私と島村一郎代議士と二人だけだったろう。その島村君は先生が蔵相官邸から戦後の家屋払底のため、適当の移転先が見つからない時、平井の自分の家の母屋を開けて先生ご夫妻をしばらくお泊めしたこともあった。だからその人情の薄さというか、情なさというものを、それぞれによく味わった。味わったけれども、これを逆に言うと、そこに石橋さんの一つの政治的な淡泊さというものがあるのであって、いわゆる親分としての人をつかまえる強さというものに欠けているところがある。世間の人情も薄かったけれど、これは石橋さんの政治的淡泊さが一つの原因だった。

そこで私がそのころから心に期したことは、石橋内閣を作るということであった。そのためには石橋さんの「政治的淡泊」さというものを、どうして埋めるかということに努力をした。ところがこれは僕も同様な欠点をもっていて、

いわゆる政界のボスといわれる人は、よく人の面倒も理非曲直を問わず見るのであるが、石橋さんにはそれがない。それがある意味においては、さっき述べたようなことの原因になったのではないかと思う。

先生が追放解除になってから、吉田内閣のときだが、私はいわゆる反乱軍というのを起した。昭和二十七年、福永幹事長反対に端を発して、当時の自由党の議員総会で起したわけだが、そのとき私は、ほんとうは騒ぎの中心ではなかった。いかにも私が中心のように見られたり、石橋さんが背後で糸を引いているんではないかといわれたが、これは嘘で、石橋さんはむしろ反対に、福永君でいいじゃないか、ということを私に言っておられた。私は福永君とは友人で、福永君に対して反対とか賛成ということではなかった。しかし私が同志とともにいよいよやるという腹構えになったときは、先生はなんとも言わなかった。そのあとで解散を突然やられ、石橋さんは除名になり、そこで民同派というも

のをこしらえた。そのとき同志が五十六、七人集まって、石橋、河野両氏の除名を撤回させ、党内の民主化ということを主張した。その集まりの中で、石橋さんを見ていると、みんなが先生の除名を撤回させるために騒いでいるというのに、悠然としていて、自分のためにみんなこうやってくれているんだというような私情が、ひとつも見うけられない。ちょっとじれったいくらいだった。だがこれも石橋さんという人の大きさなのだ、と私は改めて痛感したことだった。

消えた金

そのあと、二十八年三月だ、我々は脱党した。脱党はしたが、保守合同という大目的の達成のために今は故人の緒方竹虎さんと石橋さんに連絡をとって、それは私が中に立ったことだが、鳩山さん以下、先生も復党をすることになった。その年の十一月だった。このとき、石橋さんは実は復党がいやだった。しかし同志の大部分が復党を欲しているんだということで、大勢に従った。だから石橋さんが、自分の感情、信念に反してまで、いわゆる子分というか、自分の後進のために、自己の政治行動をきめたということは、おそらくこの時だけ

だったろうと思う。それだから、その間にはいろいろの流言が伝わり、デマが飛んだ。

その時のことで、鳩山さんの、文芸春秋発刊の回想記に出た〈消えた二千万円〉は、ついでだからこれにちょっと触れておくが、これには二つのデマがからまっている。一つは河野一郎氏あたりは、鳩山さんが復党に踏み切ってしまったから、そこで、こんどは鳩山さんの代りに、石橋さんをかつごうという話をした。そこで、

「石橋さんはその話を承諾した。ところが次の日になって石橋さんはそれを断った。つまり一晩にして考えをかえた。怪しからん」

こういうことを言って先生を攻撃する人がいる。これは全く事実に反することで、そういう話を石橋さんに持ち込んだことは事実だけれども、石橋さんが承諾をしたことはなかった。というのは、石橋さんは、自分はあくまで鳩山君

を立てることに腹をきめている。自分は鳩山内閣を作るということに努力し、そういうふうに言っているのだから、いまさら自分がかつがれるというのはまちがった話で筋が通らない。鳩山君が帰るというのなら、自分もやはり帰る。それが本当じゃないかと思う。と、そうおっしゃっていて、最後まで承諾したという事実はなかった。

もう一つは復党したあとの、問題の二千万円。これは二十八年四月に吉田自由党と鳩山自由党とが分れて選挙をした。その選挙の費用は、東洋経済の宮川三郎取締役会長さんが中心になって会計をした。当時は、選挙が苦しいというので借金もしたわけだ。それからそのあとの党の運営にも、同志の維持についても、実はそうとうの借金をしてきたのであった。さて我々が復党したあとで、私は宮川さんに向かって、このあと始末にはいくら金がいるか、と尋ねた。復

党するまでは金の話は全然しなかったのであるが。すると宮川さんは、年末なので二千万円もあればいいと言う。私はどこに借金があるか分らないが、宮川さんがそう言うから、そのまま当時の幹事長であった佐藤栄作君に相談をし、宮川さんとも話しあって、二千万円という金を調達した。それを当時党の資金局長であった坪川信三君が鳩山さんのところに持っていって、鳩山さんはそれを宮川さんに渡した。鳩山さんはそれがどういう性質のお金であったか、また二千万円の内容がなんであるか、それは全然知らなかった。タッチもしていなかった。石橋さんは、

「そんな金、心配してくれなくてもいいよ。自分たちでなんとかするから」

ということを言っておられた。しかし私としてはそうはいかなかった。宮川さんが苦労していることもわかっている。ところがそのあとで、宮川さんのいう二千万円以外に、三木武吉さんのところで三百万円、それから石橋、三木、

河野三氏の連名になっている借金が八百万円あることがわかった。つまり三千万なければ解決のつかない問題であった。

ところがこの二千万円というのは、保守合同というか、そういうことに賛成をする、その目的の達成をするためという理由で寄付を仰いだお金なので、あとに残った人つまり復党しなかった人の分の借金というものまで見るべきものかどうか、これは一つの疑問だった。同時に実際問題として、右に述べたようにお金が足りない。それにこういうお金は、あとであれでは足りなかったから、また追加してくれなどということが通るものではない。そこでいろいろ議論が起った。しまいには二千万円という借金が宮川さんのところにあること自体を認めないという人まで出てきた。私はそんなばかなことがあるか、使うときには使って……というようなことで、双方の感情が非常に食い違った。するとな

にが幸いか、その後、造船疑獄というものが起って、検察庁は石橋湛山後援会の帳簿を調べた。するとこの二千万円が全部、当時の三菱銀行（千代田銀行）の小切手で、借りていた先にキチンと綺麗にみんな返されていた。つまり金の行く先が判然としていることがわかった。だから私はこのことではいろいろなことを言われたが、あまり苦にはしていない。さあ、といえば、いつでも明るみに出すことができるからである。とにかく金を使うときには人に作らせ、借金までさせておいて、返すときには、そんなことは認めないという、そんなばかな話はないと思う。これは余談だが、三木さんの借金も、三木、河野両氏の分担になっていた借金も、みんな始末をした。だから宮川さんの借金を返した金というのは、二千万円に対して九百万円にすぎなかった。

吹きさらしの祝賀会

次に例の総裁選挙がはじまった。これも石橋さんは、ほんとうの御大将だ。第一線の戦略、戦術というようなものは、みんな私らにまかせっきりで、何事もタッチしない。顔を出すところには顔を出す、それだけだった。しかしその間において、いわゆる選挙運動をしている人間（自分が候補者になっているものとか、あるいは運動をするというような）そういうものによく見かけられる哀れっぽさ、媚態……そういうみっともなさというものが全然なかった。それはもう堂々たるもので、勝敗は問わないという気持は初めから本当にあった。

この際、みんなが立ったほうがいいと言うし、また自分も立つことが自分としても正しいと信ずるからやるんだ。しかし負ければ、喜んで勝った人に協力するという態度で終始した。この公選はようやくいわゆる七票の差で勝ったわけであるが、投票場にのぞんでいるときの先生はというと、私は先生の隣に坐っていたけれども、まったく平然とした態度でふだんと変らない、これは付焼刃や真似でできるものでなく、やはり真の底からの堂々たる大将の器なのであった。しかし私自身は、もっとうんと開いた勝ち方ができるつもりでいたから、(投票日の二、三日前から河野氏らの猛烈な切崩しにあってしまって、とうとうわずか七票の差になってしまった)、私は先生のところへ行って、

「どうもすみませんでした」

といって挨拶をした。そのすみませんでしたという意味は、わずか七票の差でしか勝てなかったということを、私はいわゆる参謀長格として先生におわびを申し上げたのであった。そのときもただ、

「うーん」

と言ってうなずいていただけだった。

石橋内閣の組閣のときは、ほんとうに大変な難航であった。石橋総理としては、誠心誠意、派閥解消というか、党内に不満をもたせないような組閣をしたいと思って努力をした。ところが、一向、風波はおさまらない。

そうした騒ぎのあるとき、先生は私に、これはどうしても作りあげなければならんか、それとも投げだすかだ、どうしても作りあげなければならんというのなら、みんなが椅子をほしがっているのであるから、まず君自身に椅子を返してもらわなければならない。それでいいかとおっしゃった。私は言下に、私は石橋内閣を作ることが念願で、自分のことを省みる気持はない。私はそんな

ことはかまいませんとお答えしたのであったが、要するに石橋さんという人は、それがまた石橋さんのさっぱりとした立派なところなのだが、前にも述べたように、これを裏から見ると、政治家としての粘りというか図々しさというか、親分としての我欲が足りない。しかしこれは石橋さんの長所でもあり、こういう長所が日本の政界にほんとうに理解されて生かされてくれれば、派閥解消という大目的は次第に達成されるのではないかと考えている。みんなが自分のところの力の伸し合いばかりしていては向上しないのであって、全体がお互いに譲り合うということが大切であろう。これは石橋さんの弱点でもあるが、しかしこれが反面、強いところだと言える。

組閣があまり難航したから、私と三木君（幹事長）と池田大蔵大臣の三人とで、正直なことを言うと早期解散を決意した。この早期解散を決意したことが、実は石橋さんに過労をしいてしまった結果となり、なんとも申しわけのない次

第であるが、とにかく組閣が難航し、予算が難航した。それも純粋の理屈に合った難航ではなくて、要するに私闘の如き派閥間の感情がからんでの難航だから、これではいかんというので、我々三人は早期解散を決意したわけである。同時に全国遊説を思いたって、あの一、二月の寒いときに東京を振り出しに、あるいは北海道へあるいは大阪、名古屋、九州へと、先生を先頭にみんなが歩き廻った。大阪のごときは飛行機で行ったが、霧が深くて飛行場に着陸ができない。私は二度も大阪の上空へ行った。総理は一旦は大阪の上にまで行きながら、霧で着陸できないから名古屋に帰ったりした。これが非常に石橋さんの健康に無理をしいてしまった。

しかし側から見ていると、少しもくたびれたような顔をしないし、いつも元気だし、それから日程が途中で変えられて、行く先が前よりも多くなったりふ

えたりしてもいやな顔を一つもされない。北海道では総裁選挙の時に我々の同志として働いた椎熊三郎君の面目をたてて、小樽まで夜遅く出かけていったり、それから名古屋では小林綺さんのために岡崎まで行った。そばのものが先生の健康を気づかって一生懸命にセーヴするのだが、先生は直接頼まれるといやという返事をしない。その間に朝から夜おそくまで、よくもこんなに陳情があると思うくらい、入れかわり立ちかわりの陳情がある。すると先生は暇さえあればその陳情団に親切に会って、ちっともいやな顔をしない。これが民主政治家としての石橋さんのよさだが、これも過労の一因となった。私はこうした陳情狂というものには実際イライラした。実際問題として、そんなときに陳情しても役に立つものではないのに、物見高いというか、国事に心身をすり減らす政治家の体というものを少しもかまわない、まったく心ないわざであった。

もう一つは、早稲田大学の祝賀会が、一月二十三日、早大の大隈公園であった。私はやはりこの人たちにも反省してもらわなければならないと思うのだが、冬のことだしオーバー着用と案内状に書いてはあり、主催者側は、我々にオーバーを着ろ着ろと言うのだが、招かれてきた我々はお祝いを言われる側から、石橋先生をはじめ私たちもまさかオーバーを着るわけにはいかない。ところが会場は吹きさらしの野天だから、一時間半くらいに渡って、入れかわり立ちかわり祝詞を述べて下さるのだが、若い私なんかまでが寒くて困った。おそらくそれまでの過労に、このときの寒さが加わって、先生の健康を奪ったのだろうと思う。それから、その翌日には、外国人記者団と共同会見があった。そのスピーチの原稿を作らなければならない。石橋先生は決して人の書いたものをそのまま読まれる人ではない。よく私は総理大臣室へ行くと、先生が机に向かっておられるから、何しているんですかと言うと、いや、いついつの原稿を書い

ている。そんなもの、人が書いたのを読めばいいんですよ、と言うと、そうもいかないさ、と相変らずやめないで書いておられる。その日も夜おそく、十二時少し過ぎまで、北沢副長官が外務省で作らせた草稿を日本語に飜訳し、それをまた先生がいろいろ手を入れられた。当時私は日活ホテルにいた。

石橋さんも、

「日活に泊まるか」

といって部屋をとられたが、私を追いかけてくる新聞社がたくさんいるので、それでは今夜は下落合まで帰るといって、下落合の自邸まで帰って休まれたのであった。

宰相倒る

ところが翌日の朝、閣議の日だった。川上秘書官から私に電話がかかってきて、総理は病気で倒れられた。たいしたことはないと思うけれども、まだ原因、状態ははっきりとわからないという話だった。そのときに川上君が、どうも睡眠薬を飲みすぎたらしいという。これが私がその後、それならばご病気といっても大したことはないんだと思って、そのままを閣議で報告したのが、いろいろなデマの材料になってしまった。そんな訳だから、初めはそんなに重病じゃないと思っていたのだが、しかしなかなか経過がはかばかしくいかない。そう

こうしているうちに、当時ほうぼうの人から、よく静養する期間を小出しにしたことがいけないといわれたものだが、三週間の静養を発表した。このとき医者（村山主治医）は実は二週間でいいと言っていた。それを私が田中副官房長官と相談して、一週間の余裕をつけて三週間と発表した。また医師の診断も見当ちがいだった。もっと早く癒るだろうと思っていると、老人性肺炎は長くかかるし、心臓が少し弱っていた。

この間、石橋先生に感心したのは、とにかく気分が良くなると、もう議会の論戦の速記録やなんかを取り寄せて、国会に出る準備をしておられた。これはなかなかできないことであろう。しかし残念ながら病勢はよくならないで、そのうちに佐々先生（杏雲堂医院長）と村山主治医から、どうも当分の間静養しなければならない、と言われてしまった。そこで三木幹事長と相談をして、さらにもうお二人の先生を加え、四人の医師団で最後的診断をしていただき、それに従うということになった。医師団の所見に従おうといっても、既に、佐々先生ほどの名医が、少なくとも二カ月以上ということをおっしゃっているのだから、ここで一応の覚悟はきめておかなければならないと考えたので、私はそのことを石橋先生に卒直に申し上げた。

すると石橋先生は、私の手を握って、

「……何事も運命だよ」

とただそれだけしか言われなかった。だが私は、もうそれだけで石橋先生のお気持、それに対してどう処理したらよいかという自分の決心もきまってしまった。この短い一言で石橋先生のお心がはっきりとわかったからである。そのころから先生は一世の賞賛を浴びた例の書簡の構想を練っておられた。私は三木君と相談をして、四人の医師団による最後の精密診断が終るまでに、なんと

かこの難関を切り抜けられないものかという努力を最後まで続けた。しかし当の先生は、

「もし二カ月以上の診断が下ったらもうじたばたしない。一カ月くらいで癒るというんだったらがんばるが――」

とそのところのけじめは、はっきりつけておられた。それはもう淡々かつ堂々たる進退であった。そこで私も三木君も、どうしたら先生のこの堂々たる進退を生かすことができるかということに、心を砕いた。これはめったにしゃべれることではない。うっかりしゃべれば、とんでもない大変な混乱を巻き起すからである。この三木君と二人きりで事を運んだことがいろいろな誤解と非難を生んだ。然し私は正しかったと思っている。かくて、例の書簡を宛名人の岸氏とそれから三木幹事長に渡し、それから党の首脳との協議に入った。粘れという声が非常に多かった。少なくとも翌日までは書簡の発表を延ばせという人

があった。しかし私は、どんなに遅くなっても、その日のうちにこの書簡を発表するということが、やはり石橋さんの進退を最後まで立派にする、またその気持を生かす道だと思って、無理をおしてあの手紙を夜中に報道陣に読み上げたのであった。

それが終ってから私は、ホテルに帰ると、もう疲れていたから、酒を飲んで、そのままベッドにもぐり込んでしまった。翌日の朝、目をさまして新聞を見ると、どの新聞も石橋さんの進退を絶賛している。私はその新聞を見ながら、ああよかったなあという気持と、それから先生の気持をほんとうに生かし得たという安堵感とで、何か肩の重荷をおろしたようだった。昨夜まではただ残念だという気持はあったけれども、べつに悔しいという気持にはならなかった。涙なんかももちろん出なかった。だが、この時に至ってはじめて、ああ、残念だ

なあ、と一種の寂寥感みたいなものに襲われた。これだけ世間の信頼を得ているものを、わずか二ヵ月で退陣せしめなければならないのか、ということが痛恨極まりなかった。そこへ広川弘禅君から慰めの電話がかかってきた。この時になって私ははじめてなんともいえない気持になって、受話器を握ったまま、二十年か三十年ぶりか、オイオイと声をあげ、男泣きに泣いた。

先生のご容態は、日を越せば必ず元の立派な健康体になると私は信じている。どのお医者さんもそう言っている。医師団の一員の、東京大学の沖中博士は、二ヵ月の静養を要するという診断をくだしたとき、私が、

「それでは総辞職します」

と言ったら、

「そんなばかなことがあるものか」

と、私に向かってほんとうに強い言葉を投げてきた。そして、

「アイゼンハウアーは半年以上も休んだじゃないか。この病気は必ず回復する。それをこれだけの医者が証明しているのに、なぜ総辞職をするのか。日本の政界とはそういうものか……」

と非常に痛憤しておられた。

日本の政界はまだそれほど大人になっていないのである。いまさらそんなことを悔んでみてもしようがないが、日本の政界の現状、それから日本の議会制度とアメリカの議会制度の在り方のちがいである。

ともあれ、医師団のそのときの診断にもあったとおり、病気は必ず癒る。だが先生が健康を回復されても、周囲の人は変な野心の道具に先生を使わないでもらいたい。先生は政界の、いや日本の良識として、あくまで高く在っていただきたいのである。それが石橋さんを天下が求め、天下が期待するところであ

勝負の孤独

ろうと思う。

私は身をもってこの名峰を、日本のために守りぬく決心である。

勝負と平常心

私を政界の勝負という評者が意外に多い。

どういう理由だろうか。私が碁や麻雀が好きで、事実以上に自分で強いことを宣伝する結果だろうか。

麻雀はもう三十余年やっている。まだ小学校の四、五年の頃、台湾にいた親類の者がお土産に麻雀牌を持って来た。父はそれがどんな遊びであるかを知らずに私たちの使用を許した。大正の末年であるから菊池寛氏や久米正雄氏らが始めた頃とほぼ同時代であったろうと思う。

もしその頃麻雀が普及していて父がそれを知っていたら決して許しはしなかったろう。昭和の初め麻雀賭博で文士や有名人が検挙されて問題になったとき、私たちはまだその牌で遊んでいたのであるが父はもう忘れていた。

従って雀歴は大変古い方であるばかりでなく、新聞社に入ってからは方々の記者クラブで磨きをかけ、特に上海在勤中は国際試合で北支にまで遠征する有様であったから、

「麻雀はスエズ運河以東では一番強い。西の方の人とはまだ手合わせをしていませんがね」

などとハッタリをかけている。

小汀利得氏は私のいた新聞社の編輯局長、主筆、社長を歴任した私の育ての親であるが、麻雀は大嫌いであった。

「記者クラブの時間つぶしに碁、将棋は良い、何時でも止められるからだ。麻雀はそうはいかない上に徹夜はする、金は賭ける、麻雀をするものにロクな者はいない」

と言うのである。

事実、小汀さんに彼奴麻雀をやると睨まれた者で役付になった者はいない。しかし随分御目こぼれ（こぼしではない）があったもので、その後編輯局長から主筆と躍進した円城寺君など麻雀の大家であったし、私の麻雀も御存知なかったらしい。

しかし碁、将棋にも金を賭けるものもいるし、麻雀も十銭麻雀と言って一回毎に清算して何時でもやめられるのが考案された。必要は発明の母である。

勝負師の話が賭博論になって来たが、人は私の名前博英をバクエイとよぶ。

例の総裁選挙のとき、議長であった故砂田重政氏が私を石田バクエイ君とよんで満場を哄笑させ、緊張した空気をほぐしたことがあった。また昨年私が祖

父の五十年忌を郷里で営んだとき祖父の友人であった久原房之助先生が、

「私たちは石田君のことをバクちゃんとよびます」

と会衆の前で挨拶をされ、参列した私の関係しているカトリックの女学校の尼僧の童貞さんに、

「どうして先生の名前をバクエイとよぶのですか」

と訊ねられ閉口したことがあった。

これなども私を勝負師だとする材料になっているのであろう。

碁の方はこれも上海在勤中、日本人クラブに美人の棋士がいて、その人に手ほどきを受けた。動機はあまりよろしくない。

昨年秋、日本棋院から三段を貰ったが、これはどうも気がひける。是非初段にしてくれと降段運動中だが、なかなかきいてくれない。

もっとも、私より一、二目弱い山口喜久一郎氏が二段を貰っているのを知っ

てから降段運動は中止しようかとも思っている。

私の碁は相手によって大変腕前が違う。周東英雄氏は私より二目位強い人と良い勝負をするのだが、私にだけは無暗と弱く、白でも勝つ自信がある。

周東氏はそれを私の言論戦のためであるとして、あるとき、私が一言も喋らないことを条件に戦いを挑んで来た。しかし私の連勝に終った。彼は見物が大勢いて、私がパントマイムでこの見物を笑わせ、彼の平静を破ったのであるから今度は二人っきりで言論を封じてやろうといい出した。

そして三田東急アパートの私の部屋にやって来た。

「一言も喋るなというても、お茶をくれともいうてはいかんのか」

「お茶は初めに貰えば良ろしい。君は妙なときにお茶をくれという危険がある」

という具合にグランドルールを定めて三連戦をやったが、これも私の連勝、

互先であった。周東氏はコチンコチンになったのである。

富士製鉄の永野重雄氏は財界有数の打ち手だが、私が三段を貰ったのをきいて四目置いて打った。勿論私が置いたのである。

しかし明瞭に死んだ私の石をわざわざ手ぬきして生かし、揚句の果、二目勝たしてくれた。私は以来あまり上位の人とはやらない。

しかし外の勝負事は殆どしない。

競馬は前後数回行ったことがあるだけであり、競輪にいたっては全然興味がない。スポーツは野球だけ、それも弱い方を応援するだけで特別の贔屓はない。近頃早稲田の水泳部の相談にあずかっているがレースはまだ見たことがない。

私は勝負事は平常心だと思っている。特に麻雀のように、運が相当支配するゲームでは、その運を良く見て逆わないこと第一だ。必ず波の高低があるのだから、上げ潮には乗り、下げ潮の時はじいっと我慢をして損害を最少限に止めることだ。徹夜でやったり、際限なく繰り返すことは愚である。

私は人生にでも勝負事にでもこの平常心、自制心だけはかく持ちたいと思っている。しかし、なかなかそううまくはいかない。

私の父は全くの石部金吉で賭け事は勿論、碁、将棋も知らなかった。

私が少年の頃、友人と花札を引いていたことがあるように思う。或いは叔母たちが相手であったかも知れない。母も母方の系統も極めて謹直な、温厚な人たちばかりだ。私は、人は笑うかも知れないが、この手堅い血統を自分で自覚する。決していわゆる投機に終始した前半生だとは思っていない。

私の祖父兼吉は、剛腹な事業家で文字通り七転び八起、一時は家産を蕩尽して露店商に近いことまでしたらしい。

結局、花岡鉱山の開発に成功し、秋田県内は勿論近県にわたって三十数鉱区に手をのばして、これからという時に事業上の争いで非命に斃れた。なかなかの新しがりで蓄音器を県内ではじめて購ったり、丸善と取引して舶来品を使用したり、叔母たちは随分ハイカラに育てられたらしい。郷里の古老は、私がこの祖父の血を濃厚にうけているという。

私は名誉には思うけれど全面的に首肯しない。

中央公論の五月号に青地震という人が「石田博英の新しさと古さ」と題して私の評伝を載せている。私にかなり好意を持ってくれていると見えて、過褒に属する部分が多い。しかし、

「石田は年少にして争いを好み」といった調子で私の前半生のエポックメーキングな事件と、それに対処した私の態度を全部〈石田は勝負師だ〉という観点から書いている。私が上海支局長時代、終戦の半年前に社命をまたず支局の

財産を処分して引揚げたこと。終戦後、新聞放送労働組合の赤化に反撃したこと。代議士立候補。反乱軍。石橋先生擁立の決意。総裁選挙。石橋首相の病気退陣。全部が私の勝負師的な勘の働きに帰している。

一体、勝負師というのは何を指すのであろうか。

まず第一に、その事の正邪利害は別として勝敗に全力をあげることだろう。第二には、精密な準備、計算、調査より専ら勘に頼って事に当ること。第三は一か八か、いわゆるオール・オア・ナッシングの覚悟で臨むこと。第四は、その性質上衆議にはかるより独断専行の性格。などをいうに違いない。

とすれば勝負師といわれることは政治家としては名誉ではない。

傍観者から見れば痛快であるかもしれないが、国家及び国民の安危を担う政治家のなすべきことではない。特に東条が、このままで行けば石油が無くなってジリ貧になるからといって勝算なく太平洋戦争に突入し、死中に活を求めると称した如きは勝負師であるかも知れぬが、政治家としては一種の反逆行為である。然しこの勝負師の定義は、私が勝手につけたもので必ずしも正しいとはいわない。

だが一応この定義の上に立っていえば、私は第四の点は認めるが他は一切承認しない。私が石橋先生追放の日、集まる者僅かに三名という有様を見て石橋先生擁立を決意したのは、決していわゆるアンダードックに賭けたのではなくて、石橋先生の人格、識見に傾倒し、惚れ込んだ結果であり、この人、この人の考え方、この人の政策こそ日本を救う唯一の道と信じたに外ならない。

追放が永久に続いても私の信念は変らなかったであろう。鳩山政権樹立の運動もその道程でしかなく、私は鳩山氏には批判を持っているし、石橋先生以外に私は一人も情熱を傾け、ひたむきになれる人を持たないのである。石橋先生擁立以外に私は選ぶ道がなかっただけだ。従ってこの場合、勝敗成否は石橋先

生以外に人がないのだから、成功しない筈はないという極めて主観的なものであった。

終戦直後、新聞放送界へ急激に共産党の支配の手が延びて来た。特に読売新聞は社主正力松太郎氏が戦犯で巣鴨に収容され、鈴木東民君一派に占領されてから、その影響は紙面にまで露骨に及び「赤旗」とかわるところがなかった。

私のいた日本経済新聞などでも、戦時中は検閲課長をやって情報局や軍報道部の威を借りて、私たちの筆に掣肘を加えていた男が組合の書記長となり八革新ぶりVを発揮した。私には鼻もちならず、生理的に反撥を感じ、どうにもならなかったのである。

勿論、混乱期に於ける公器としての新聞、放送のあり方についての私の信条とも相反していた。このときは始めた以上勝たずにおくものかと、ガムシャラ

に手段を尽くして闘ったのである。

代議士立候補も私としては勝算は充分あったのである。私の出身地付近の有力者は、その前年の連記制の選挙に全部立候補して落選した。

従っていま私の地盤としている二市三郡には保守系では一人も立たないことが確実であった。その上、追放された前任者の中田儀直氏の陣営が全部私を支持してくれる。弁舌にはいささか自信がある。若い。心配なのは金だが、中田氏自身が理想選挙というより貧乏選挙をやって来た人だし、三木武夫君の選挙を手伝って、金はなくともやれるという実績を見ているのである。

反乱軍事件は当初、私は主動者ではなかった。福永健司君とは友人であったし比較的冷静な立場であった。それが当時私は議院運営委員長であって、その委員長室が反対派の溜りとなり、何時の間にか中心に押し出されて終ったのである。

この何か始めると必ず一生懸命になり、その成否は自分の責任、名誉に関すると思い込むのが私の特長であって、これは私が何時も自覚することで、人のやることがもどかしくなるのである。何も私だけが熱中することはないと自省するのだが、どうにもならない。

但しこのとき議員名簿に印をつけ採決でも決まらず勝つと宣伝する一方、七十余議案を議院運営委員会に留め、場合によっては全部葬るぞと示威したことはいささか勝負師的であったかも知れない。

決断と行動

新聞社時代の上海引揚げの件にいたっては、私はいまだに外の連中がどうかしているとしか思えないのである。

二十年春になって独軍既に降服し、比島に敗れ、沖縄に上陸、内地の都市は続々灰燼に帰して無防備に近い。

このとき、人より情報を知るに速い新聞記者が、敗戦近しと覚悟しないのは何としても理解出来ない。

戦争は軍人がやるもの、その結末も彼等が何とかするだろうという長い間の

依頼心、自分の責任で自分を処理することを忘れた惰性でしかない。まして通信は同盟通信一本に統制されて、私たちの仕事はなくなっているのである。その上、各社の支局は太平洋戦開始と共に虹口から共同祖界の敵産に移り、虹口の旧屋はインフレ対策のため、とっくに金に替えて終っているのである。敗けて逆に占領されれば、敵産の建物は取上げられ、私たちは部下や使用人ともども路頭に迷うは必至である。従ってまだ支局の建物や部屋に価値があるうちに処分して、使用人に身のふり方をつけさせ、身軽になって日本に早く帰っておかねばならない。私は少しも疑わず決断し行動した。これがどうして勝負師なのだろうか。

中央公論の評者、「もし日本が勝ったら、彼は支局長の椅子を棒にふったことだろう」と書いているが、日本が勝ったら私は支局長の椅子どころか、勿論クビで会社の財産を勝手に処分したのだから背任罪で告訴されるだろうし、日本が敗ける方に賭けたのだから憲兵にも当然追いかけられたに違いない。しかしあの場合、「もし」などあり得たであろうか。

ただ私は運命的に奇妙に公私共、大きな決定的な立場にたたされる。

そのとき一人で考え一人で決断し、行動した事が常に成功して来た。誰にも相談しないのであるから、事情を知らぬ人たちには、私が一流の勘で一八勝負に出たものと見るのも止むを得ないかもしれない。

決断し行動をする。これが何時も続いていて、考えれば必ず決断する。人に相談したり、意見をきいて訂正することはない。また迷いもしない。私が決定的な瞬間に臨んだとき、私は特に自分でこういう態度でやらねばならないと思うわけではないが、このことが私の特長であろう。

石田は勝手だ、独断だ、仲間を無視する。果は、何かこの間ずるいこと、うまい事をやったのであろうという噂、批評が生れる原因はこんなところにある。

しかし決定的瞬間の決断は、多くの人に聞いていたのでは迷うだけだ。行動を衆議に待ったのでは企図の秘密が出来ぬばかりか、機を逸し、妨害を生み、効果を失う。

民主主義とは代表者、責任者を選ぶまでの手続きで、選ばれた以上、自分の責任でやるものだと、石橋内閣が出来たとき吉田茂さんが私に教えて下さった。一人で責任を負う。私だけが正しさを知っている。誤解、誹謗仕方がないではないか。

勝負の孤独、私は自分の企図が成功したとき、却て深くこの孤独感が身にしみる。

私は父も母も早く死に一族一家は皆私を頼るだけで、私のこの孤独感を慰すわけには行かない。ただ娘たちが成長して来て、良くわからぬながら私の心を汲みとろうとしてくれるようになった。しかし役に立たなくとも事の真相と私

の心境を誰かに話せば救われるであろうと思う。誰が、裏切ることなき心の友に。

石橋先生が病気にかかられて、当初の予想に反して簡単に議会には出られないことがわかって来た。

医師の意見をうるさい程ただして見た。何とか希望の灯が見えるようにと願いながら。しかし無理だ。

私は日活ホテルの自室に帰って、その場合の処置を考えていた。

いろいろな人たちが訪れ、電話をかけて来る。勿論、誠意のある見舞いもあるが政治家のものは大部分サグリだ。油断が出来ない。うっかりすると策謀、謀略がまき起って、党国を乱すことになる。石橋先生の考え方もきいておいた。

このとき、幹事長の三木武夫君が訪ねて来た。

「オイ、いかんぞ」

二人の見解、決断は一致した。石橋先生は「一ヵ月なら頑張る、二ヵ月以上ならジタバタさせてくれるな」というお考えだった。

私と三木君はその翌夜、重ねて医師をよんで意見をきき、更に専門家を加えて最後の診断を求めることにした。しかし見透しには変化が起りそうにない。

私は最悪の場合に備えて、例の手紙を準備し、神に祈る気持で診断の結果をまった。石橋邸の応接間には石橋首班に協力した同志が「ドウだ」と先生の容態を憂い、果は私が何もいわぬことを憤り、恨む瞳を投げかける。

立派に見事に進退を決めるのにはここが大切。私は心を鬼にして冷淡な沈黙を守り続けた。

それ以後の経過は世間周知の通り。私は長老連が一日待とうというのを押し切って、深更、総辞職の発表と石橋書簡をよみ上げた。

そして、官房長官室に帰って来ると私の多年の政友、親しい新聞記者諸君が集まっていた。私は大仕事を終った安緒感だけであった。

推熊三郎君が、「石田、お前が一番可哀そうだ」

と涙声で慰めてくれても、

佐々木秀也君が、

「これで良いのだ。よく見事にやってくれた」

といってくれても、何か実感として迫らなかった。

追いすがる報道陣をふり切ってホテルに帰って、バスにも入らずウィスキーをぐっと飲んでその勢いで寝込んで終った。夢も見ず何も考えなかった。

翌朝七時頃であったろうか、ハッと目がさめた。三、四時間寝たらしい。ドアの下に新聞が入っている。手にとればいずれも石橋先生の進退を絶讃し、石橋書簡を稀有の名文と賞めたたえている。私は残念さがこみ上げて来る。そこ

に電話のベルがなった。広川弘禅君が、

「オイ石田、元気を出せ、お前は立派だったぞ」

私はグッと来た。嗚咽は押えることが出来なかった。

広川君についていろいろな世評があるが、私はこの時以来、誰が何といっても心の友と信じている。

その翌日、所謂石橋派の会合があった。私と三木君は裏切者よばわりをされた。勿論、私の苦衷を知る人も大勢あった。裏切者よばわりする者とは交りを断つといい切った人までであった。いろんな噂が今日までつきまとっている。きけば、さみしいと思う。

間もなく私の親しい記者諸君や友人と夕食を共にした。

誰かが何かいえばもう私は涙がにじみ出て仕方がなかった。

三十年振りのことであった。

若い人と土性骨

私は「今どきの若い者は」などという気持はない。

第一、私はまだ若い者であるからだ。それに私たちが少年から青年の頃、すなわち昭和のはじめは、ハイティーン、ローティーンそれに太陽族、などという言葉こそなかったがモボ、モガというのがあったし、ロカビリー、マンボの代りに、ジャズと社交ダンスが流行しはじめていた。少し年代層がその頃の方が高かったようにも思うけれど、老壮年層の眉をひそめるような社会現象はやっぱりあったのである。

また、いまの〈よろめき夫人〉に当るのに〈有閑マダム〉と言うのがあった。何時でも、みんな同じなのだ。しかもその風潮に溺れ、浮かれる人たちはその年代層でも極めて限られた部分に過ぎないし、その期間も案外短いのだ。私は人間の成長を何時も信頼している社会は、単に物質文明だけでなく、心の世界でも社会全体としても常に進歩して行くものなのであると信じている。

今年の成年の日にNHKの企画で成年に達した男女と座談会をやって、私は若い人たちは大丈夫なのだという確信を持った。予備校の学生一人を除いて働いている人たちばかりであったが、堅実で嬉しくなるほど明るく、知識慾も旺盛であった。

もう生涯の残りが、あまり多くなくなった者が、長い人生を持つ者にあまりおせっかいはやめた方がよい。

問題はむしろ、親のほうにあるようにも思う。

私は早稲田大学の出身であるが、その縁故で良く学校へ行く。入学式、卒業式の参列、課外講演、それに、入学の世話など、あまり公明正大でないのもある。この入学試験の運動などは、元来効果のないものなのだ。それにもかかわらず、私が学校に頼めばききめがあるという伝説があって、毎年大変迷惑をする。むげに断るわけには行かず、郷里、友人、またその知り合いと、百人を越す騒ぎだ。どうせ気休めなのだから全部引受けることにしている。

このことは私たちの時代にもあったことで、私の父のように頑固で曲ったことは少しも出来なかった人まで、私の入学のため運動らしいことをしたことがある。

父はどうしても私を高等学校から官立大学、それも理科系へ進めたいのだが肝腎の私が物理、数学、化学みんな駄目、特に学校教練は不良というので私立の成城高等学校に裏口運動をやったらしい。校長は京大総長をやった小西重直

博士で、父の知人であった。しかし私はそのことを知らず、結局勝手なことをして落第した。父も矢張り親馬鹿の一人であったのである。

親馬鹿といえば、私もそうであるが、その私が驚いたことがある。

先般、私は、ある婦人雑誌の美人コンクールの審査員をやった。その審査の日、私は二人の先輩の代議士から自分の郷里の出場者の為に特別の御配慮をという陳情をうけてあきれかえった。

美人という客観的判断を公開の席上で決めることまで運動で何とかしようというのである。そのうちの一人は私も良心にかけて美人だと思ったので相当の点をつけ三位に入選したが、いま一人は予選のとき、司会者が「この人の予選通過に賛成の方は手をあげて下さい」といったのに対し、予選位よかろうとその依頼者に義理をたてて手をあげたら、何と十人の審査員中手をあげたのは私一人で、随分後めたい思いをした。

何しろ、その手を上げるときは会場には本人はいないが、必ずその親か姉妹がいて、何某先生から頼んだ筈の私がどうするか、何某先生が頼み甲斐があるかどうか見ているに違いなかったであろう。何某先生に後でその経過を話したら、「いや君一人手を上げてくれたのでかえって私の顔が立ったのだ」といっていた。そんなものかも知れない。

このコンクールは初め雑誌に写真を出して読者の投票で予選をして来たものだが、この人は投票では第二位であった。因に「ミス」に選ばれた美人は投票では二十位くらいであった。

大分、脱線をしたが入学試験期に早稲田に行くと女学校の入試かと思うほど女親の付添が多い。

これは戦後の現象で戦前にはなかったことだ。私は小学校四年のとき京都の師範付属の編入試験を受けたのだが、一人で行った。中学も当然である。私た

ちの時代は、小学校の入学式に母親の付添がいくらかいたが中学からは一人も見られなかった。

私の娘も今年早稲田に入ったのだが、試験は友人と誘いあわせて出掛けた。娘の話だと女の子は大体自分たちだけで来ているので、女親付添は専ら男の子だという。

この話をすると、教育に対する家庭の関心が深まった結果だとか、母親の愛情の変化だとかいって説明をする人がいる。私は首肯しない。「男の子は一人で歩かすものだ。女親が試験にまでついて行くものではありません」と私は必ずいってやるのだが、「心配でじっとしていられないのです」といい合わしたように答える。この辺が本当かも知れない。

心配なのだから、子供の為を思っているのだからという女親の行為は、全部是認されると思っているのである。これこそ、子供本位の如く見えて実は女親

の驚くべき利己心の露骨な現われであると私は思う。自分を満足させるだけの行為なのである。「可愛い子には旅をさせろ」「獅子はまず自分の子を断崖から突き落す」という諺を、もう一度考えて貰わなければならないのではなかろうか。女親にこんなことをさせている男親が論外であることはいうまでもなかろう。

若い人に人生を立派に歩ませ、社会に貢献させるように育てるのに一番大切なことは、自分の意志、自分の方向、自分の行為を、自分で決め、それを貫く土性骨と根性を養わさせることであると私は思う。特に大学は社会の指導者を養成するところであるから、知識の外にこのことが一層肝要なのだ。デモクラシーの根本は自力とそれに伴なう責任の自覚にあるのである。いまの人は何かあるとその責任を親、学校、教師、社会、政府にかぶせて、自分についての反省がないのはこんなことに原因があるのじゃなかろうか。

昨日女親について来て貰って試験をうけた学生が、入学すると今度は全学連とか何とか青臭い議論をしかけたり、ワッショワッショねり歩いているのを見ると私は吹き出し度くさえなる。

私たちの頃の学生運動は弾圧の危険を覚悟し、一人一人その場合、自分の責任で対処する覚悟を持ってやったものだ。大勢の力を何でも背景にしたがるのと大分違っていた。

根性ある生き方

世の中を生き抜くのには結局自分を強くする外はないのだ。

私は今の若い人たちの生態には楽観も悲観もしないけれど、この土性骨と根性だけは何とか持って貰いたいと思っている。しかしこれも私の考えちがいで今の人たちはそれなりの土性骨があって、それは私の考えているものより進んでいるのかも知れない。

早稲田大学の学生は、私の頃は都会の出身者三割に田舎者七割位であった。大正、明治の頃はもっと田舎者が多かったろうと思う。

この田舎者の感化が都会者に強く及んでいたのである。今はその逆らしい。学力の学校差がはなはだしくなった結果であろう。然し社会に出て優れた働きを示している人は、その大部分が田舎者なのだ。

私は早稲田大学だけは田舎者の大学にして置きたいと思う。

私たちの頃は帽子をかぶっていなくとも、新宿あたりをうろうろしていると、うちの学校だなとわかったものだ。隅の方で酒を飲んでいても帽子とって上着を脱いでいたって早稲田の学生だとすぐわかった。このごろはそれがさっぱり分らない。意気地を身上としてきた校風が中和されて、粒が同じ円満な常識の小紳士を、数多く育てるように教育がオートメーション化されてきたのかもしれない。

大変かなしいことである。

学生ばかりでなく、概して日本のインテリ階層というのは、うまく小器用に世渡りをすることが上手になった。なにかスッキリとうまくやる方法はないか、あったらひとつ教えてくれ、とくる。

しかしうまくなんてことはダメだ。強くけじめをつけてやる方法はあるけれども——。

また知識階級の機会主義、事なかれ主義も困ったものだと思う。

私が官房長官の頃、例の春期闘争で国鉄労組が抜打ちストをやったとき、新聞の論調は揃って責任者の厳重処分と政府の断乎たる態度を求めた。政府は法に従って責任者を処分した。

すると組合は処分反対闘争を宣言し所謂新潟事件が起った。それは私が労働大臣になった直後であった。私は勿論既定方針を堅持した。すると新聞は処分、

闘争、処分、闘争と果しない泥沼の悪順環を避けるため事態の早期収拾をはかれという。私を訪れる記者の質問も判で押したように同じことをきく。

私はこれに次のように答えた。

「処分をすれば今の組合の情勢では必ず反対闘争が起るのは当然で、覚悟の前でなければならない。新聞の論調も処分を主張したら、飽くまで既定方針を貫けというのでなければ、公器としての責任と一貫性が無くなるのではないか。私は反対闘争が何十回行われても不退転だ」

大体、何かやっておいて犠牲者は出すなという。責任を負うのがいやだったら最初からやらなければいいんだが、やるときは勝手なことをやって二言目には処分反対と来る。

それは明治から大正にかけての日本の暗殺史を見ればよく分るが明治時代には自分の信念で人を殺した者は自分も潔く切腹している。

大隈重信を殺そうとした来島恒喜もすぐその場で腹を切って死んだ。ところが大正に入るに従って、人を殺しておきながら自分は弁護士に頼んで減刑を願っている。昭和になるとなおさらひどい。減刑されて出てきた奴を、あたかも国士のように迎えている。大杉栄をピストルで射った甘粕大尉なんか、そのいい例だ。

人を殺す以上は国家のために一身を犠牲にするつもりでやったのであろうから、身の安泰を考える余地はない筈だ。時代が経るに従って、人間のハラの置きどころが狂ってきている。そういうところに日本の命運がつながっているように私には思われる。

学園と川田先生

学園と診断

昭和七年三月、私は全身にむくみが来て、寒気にぶるぶる震えながら故郷大館の駅に下車した。

まだ残雪が深く、馬橇に乗って親戚の家にたどりついてガクッと来た。その家の人たちは私の顔がふくれ上って目も鼻も判然とせぬので何処の誰か、一寸迷ったという。尤も私の目は細く、鼻も高い方ではないので一寸した変化に弱いようだ。弘前高等学校の入学試験にやって来て風邪を引き、若気のいたりで無理をして揚句の果は、どうにもならなくなり郷里へ転り込んだのである。そ

れから一ヵ月、一時は肺炎の危険まであってウンウンうなって暮した。

中学を卒業するときになって、私の進学の方向について父と私の意見は完全に対立した。

父は高等学校の理科に進めという。私は早稲田を志した。理科系の成績は甚だ良ろしくないのに加えて、何となく早稲田が好きであったわけだ。まだ政治家になろうという考えが固っていたわけではない。その翌年早稲田に入ったときにも経済学科を目指したのだ。

ただ頑固で窮屈な親父のもとを早く離れたい。同じ難れるなら、東京に行きたい。然し一高はとても見込がない。というようなことも確かに私の心の裏にあった。然し父は頑として譲らぬ。

そこで、私は、

「何処を受けろという命令は出来ても、入る入らぬは私の筆先一つだ」

と極めて不遜な捨台詞を残して郷里の近くの弘前へ出かけたわけだ。

私たちの一家はその頃京都に住んでいた。この旅の途中、上野駅から細田泰八郎君という同じ弘前を受ける学生と友人になった。私より二つ位年長であった。生れて初めて食堂車でビールを飲み急に大人になったような気持にもなったし、弘前に着いて寄宿舎に泊ったのであるが、早速カフエに連れ出されて、雪の中を大声でデカンショをうたって、高等学校も悪くないなと思った。

然しこの不摂生がたたって、細田君が初め風邪を引き、看病した私に伝染して、細田君はすぐよくなったが今度は私の方がとうとう前述のような仕儀となってしまったのである。それは高等学校に魅力を感じ出した私は何としても試験に間に合わそうとアスピリンにキナピリンを飲みすぎ、その中毒にかかったのである。キナピリンと言う薬はいまあるかどうか、朝鮮文字の説明書もはいっていて、私には不思議に良くきいた。

従って、私が父の意志に従う気持になったため却って急いて悪くなったのであるが、父は私が故意に仕組んだものと思い込んだ。出発前の捨台詞がきいたのである。

細田君は、合格して更に東大に進み、今、山梨県で郵政省関係の役人をしている。私が官房長官の頃訪ねて来てくれた。二十余年目であった。

五月中旬元気になって京都に帰ったが父の御機嫌が悪い。しばらくたって父は一通の手紙を私に渡して、

「これを持って大島の川田先生のところへ行って手使って来い」

私は毎日父の不機嫌に気づまりな折柄、それに藤盛成吉氏の「若き日の悩み」を読んで、御神火とアンコと波浮の港に憧れを感じてもいたので一も二もなくこの命令に従った。

父の命令に欣然応じたのは後にも前にもこの時くらいかも知れない。

大島の川田先生とは、藤倉学園の園長川田貞治郎氏のことである。

世の中で所謂、不良児とよばれている者の中に精神薄弱児が多い事を知って、先生は明治四十四年水戸市外の林間に私立日本心育園を設立した。そして精薄児の教育治療に従事すること満五年。大正五年更に渡米して、精薄児の収容所として有名な、ニュージャージー州ヴァインランドに在るジョンストン氏のトレーニングスクール内のガダード博士研究所で満一ヵ年研究された。次にペンシルヴァニヤ州ポーク在州立精薄児収容所に於て実際的の取扱法を満一ヵ年研学し、なおこの間帰朝されるまで、フィラデルフィヤ大学院で神経科、心理学科を研学。第一次欧州大戦のため大正七年十月帰朝し、暫く静養しておられた。

翌八年一月二十四日の夜、滝の川学園初代園長石井亮一氏の訪問を受け、

「井上東京府知事の紹介で意外の篤志家と会見したが、その人は精神薄弱児

「君は随分お父さんに反抗するらしいな。お父さんの手紙に何が書いてあったか知っているかい」

「知りません」

「君が強情で困るので何か特異性格でもあるのか調べて欲しい。そして将来どうしたら良いか診断してくれというのだよ」

「強情は親父の方ですよ、何から何まで私を自分の思うようにしようと思って――」

「まあ持ち給え、ところで診断が出来たのでお父さんに送ろうと思うが、その前に一寸見せてやろうか」

と川田先生は悪戯っぽい目つぎ。川田先生は小柄で大変茶目な人であった。私は勿論自分の将来に関することであるので「はい」と答えた。その診断書は、私の性向については非常に善意な判断で寧ろ父の考え方に批判を加えてい

た。

「君の息子の開放的な性格は、君のような教育を受け環境の中に育った者には理解出来ないであろう。然し世の中が君のような人ばかりになったら、警察も裁判所も不要になるだろうがギスギスして面白くなくなる。君の息子は政治家にさせたら良い。それには官学のような型にはまったところより早稲田に入れるのが適当だ」

というのである。何か難しい学術語が英語で挿入してあったが、これは父にもわかるわけはない。診断は即ちズバリであった。私は川田先生に感謝と敬意を表するより、何か勝負事に思惑が当ったように「ザマア見ろ」というような気持がした。怪しからん息子というべきであろう。

而も川田先生は一度も私の希望を質されたわけではない。この話を藤倉学園四十週年祝賀会の席上したら参会者の中にどよめきがおこった。

四十周年式の風景

その頃の大島はまだ藤盛成吉氏の「若き日の悩み」の世界が残っていた。東京湾汽船は霊岸島から出帆して、せいぜい五百トン位であったろうか。阿部虎のおしゅんさんという人がアンコの女王であった。椿油を売る店の看板娘であった。今でも健在であろうか。

元村の港も、そして風の悪い日に泊る岡田村も解でなければ上陸出来なかった。元村から馬の背の学園まで約半里、私たちは歩いた。自動車など、全島で一、二台もあったろうか、バスも記憶にはない。この途上、私は初めてくさやを干しているのを見た。異様な臭いであった。こんなものを喰う人がいるのだろうかと思った。それが今では私の無上の好物の一つになっている。

学園は男子部、女子部に別れていて、園児は約八十名位、私は男子部の二階に一室を貰って、専ら比較的程度の良い子供たちの遊び相手、それに夜は交替で寝小便防止もやった。私は次第にこの子供たちの問題に興味と情熱を持つようになり、早稲田に入学してからも幾度か夏休みを学園で過し、新聞記者時代にはこの問題を扱った読物を書いた。

そして「忘れられた子供たち」と「異常児とその作品」の二著を出すことが出来た。「忘れられた子供たち」は同じ頃近江学園の田村一二君がこの子供たちの生態を扱って「忘れられた子等」という本を出し、これは映画化された。戦後も再版され、犯罪や売春と精神薄弱の関係を世間に訴えるのにいくらか役にたった。

私の与えられた部屋の前に千葉園芸学校を出たばかりの森下武成君という人がいて農事指導に当っていた。農事指導は川田先生の治療的教育の基本方針の一つで、どんな子供でも世の中に何か役に立つようにせねばならぬ。今の言葉でいえば生産に参加させなければならぬ。また出来るのだ。という先生の信念に基づくものであった。川田先生は、また学会で〈精神薄弱児は治る〉と断言して並いる専門家連を驚倒させたこともあった。この治るという意味は〈生産参加〉であると私は理解している。

従って先生は、山下清君のように稀有な特異才能に世間の注視を集めることは、この問題の正しい理解を妨げるもの、教育の邪道であるという考えであった。

森下君を紹介して少し脱線した。森下君は実は大島滞在中、私の同性愛の相手と疑われた人として引き合いに出したのである。

いつの頃か実践高女の生徒が三原山で同性愛心中をやり、三原山は一躍大磯の坂田山と共に心中界の花形となった。坂田山のほうは後続部隊はなかったけれど三原山のほうは大変な騒ぎとなった。毎夏大島を訪れる度にその甚だしい変貌は私共を悲しませた。然し同時に三原山に対する好奇心もわいて来た。こんなに度々大島へ来て、三原山に登らないのは話にならんではないか。

ところが川田先生はどうしたわけか三原山登山を断じて許して下さらない。私と森下君は窮余の一策として、ある日の夜十時過ぎ、仕事が終って一同寝静まるのをまって、学園を忍び出た。夜間登山と洒落れたわけだ。然し八合目位で自殺防止の警戒網に引っかかり、同性愛心中の未遂者として元村警察署に引致された。

藤倉学園の者だといっても、こんな顔で同性愛心中などするものかと強弁しても、心中は顔ではわからんといってきいてくれない。

やっと釈放されたのが午前三時過ぎ、夏の空は明るみかけた頃だ。仕方がない、出直すさというので、学園に帰り足音を殺して戸を開けると何と、川田先生が立っているではないか。

川田先生は五尺たらず、私は六尺、散々叱られている姿を今になって想像してみるとおかくしなる。

然し結果に於て私の方が先生を出し抜いて終った。先生は私たちが三原山登山をあきらめたものと思っておられたのだが、私たちは再起を図り、警戒部隊にわたりをつけ遂に成功した。私たちにとってマナスルの征服にも当る快挙であった。やはり四十週年祝賀会の席上、私が挨拶の中で、

「先生は私たちが結局三原山に登らなかったとお思いでしょうが、その後間もなく登ったのですよ」

というと「エッ登ったのか」と奇声を発し、満場大笑いとなった。森下武成君は現在愛知県県庁に勤めていて、相変らず農村の指導に当っている。私が労働大臣在職中、全国婦人大会というのを催して生活改善の指導者を集めた時に、参会者としてやって来た。これも二十数年めの対面であった。

内閣総辞職を数日後に控えた昭和三十三年六月七日、八王子市美山町の新設の多摩藤倉学園で、財団法人藤倉学園の四十周年記念と多摩藤倉学園の祝賀式が行われた。

この分院は大島の方が手ぜまになった上、大島では遠すぎるという要望もあり東京都と厚生省の補助を得て出来上った。勿論、面倒な手続や法解釈上の問題があったが、丁度私が官房長官在職中であったので色々相談にあずかった。

またこのとき、日本で最初の国立の精神薄弱児の収容施設である秩父学園を創立することが出来たことも、私のひそかに喜びとするところである。

川田先生は分院の敷地を求めて八十歳の老軀を顧みず自から各地を歩かれ、途中病を得てかなり長く休まれたけれど、遂に多摩川上流の地を定め、学園の四十周年の記念日に開園の運びとなったものである。関係官庁をはじめ、各方面との接渉は専ら先生の令嬢である川田仁子さんが当った。

先生には二人の令嬢があって、私が学園にいたころはまだ小学生、妹のハト子ちゃんなどはよく私にだかれて遊んだものであった。それが両人とも結婚をしてそれぞれ二児あり、いま見れば往年の二人の姿そのままなのも時の移りと人の血の争われぬつながりを語っていた。人の血のつながりといえば、仁子さんは先生の志をついで医師となり、いま東大の内村博士の下で精神医学を研究する一方、藤倉学園の仕事を引受けている。

その仁子さんが祝賀式の案内にやって来て、

「パパが多摩の方は自分がやるから私は大島の園長をやれと頑張るのです」

私は先生の病気の恢復状況を知らなかったけれど何しろ八十歳の高齢、その意気盛んなことに驚くと共に、生涯を一つの仕事に捧げ尽くそうとする気魄に全くおそれ入った。

私は勿論、出席を快諾した。それも心待ちにその日を待ち、定刻一時間も前に到着して、係の人たちをまごつかせた。労働大臣が精薄児の学園に来るということは、三多摩の労働省の関係者には納得出来なかったらしく、それに名を借りて失対事業を抜打ち的に視察するのだろうと勘ぐって、その準備をしたという話まで聞いた。

先生はもう余程快くなっておられたが、まだ椅子に座ったままであった。そのまま式に臨まれた。

「私の葬式に来なくても良いから、祝賀式だけには出席して欲しい」

この先生の御希望には四十年の長い間、夏休みに学園を訪れて先生御夫妻を

パパ、ママとよんだ教え子たちは従わざるを得なかった。みんな既に白髪をまじえ、堂々たる一家をなしていた。年代が違うのでお互いには面識はないが集まれば忽ちパパの子供たちとなり、語る思い出は同じ泉であった。

今春より内村祐之博士のあとをうけて精神医学教室主任となられた東大教授秋元波留夫氏も、東大在学中休み毎に訪れ、学園を自分の家のように過された方であり、また、東京医科大学精神科教授島崎敏樹氏も内村博士の紹介で東大の医局員時代に学園を訪れた。その少し遅れた時代、現東京教育大学特殊教育学科助教授西条三四郎氏が一高生でぶらりと来園、はじめ医者になるつもりが先生のすすめで文理大に進み、更に千葉医大も卒業されて特殊教育学を専攻するようになったという。また新宿生活館長塚本哲氏、更に前述の国立秩父学園長菅修氏も先生をパパとよんだ人であった。式は先生の信仰であり、学園の精神的主柱となっているキリスト教の下に進み、十数名の収容児童が讃美歌をう

たい、教え子たちが思い出を語り、先生に讃辞を呈した。私の外はみんな先生の仕事の継承者、専門の学者となっているのである。私だけは先生に政治家になれと進められたのはどうしたことであろうか。勿論、私の中に学者になる才能などはあり得よう筈はない。この点、精神医学や児童心理学や特殊教育学をやれといわれなかった先生は正に当然であった。然しその私でさえ門前の小僧となり、おこがましくも精神薄弱児について著書を公にしたのであるから先生の感化はまことに偉大といわなければならない。

ひたむきに世のため、神のために身を捧げられた先生の生涯が、当時の若い人々に与えた感動の大きさをまざまざと示していた。

私は先生に診断をうけに行ったのであるから、かつての〈園児〉の代表として最後に挨拶をした。

この祝賀式の数カ月前ある新聞社と民間放送の者が大島を訪れ、学園には監

禁室がある、園児は始終空腹に苦しんでいるなどという悪意ある取材をして帰ったことがあった。連絡を受けて私は早速それぞれの会社の幹部に話してこの記事が公に出ることを防いだのが、先生は非常に心外であったらしく、このお祝いの謝辞の中にも言及されようとして仁子さんに止められていた。

私は代って事情を説明したが、専門外の者の無理解と悪意は、どんな立派な仕事でさえこれを曲げ、世間に誤解を与えることは簡単であることを知った。まして私のような政治家は充分覚悟をせねばならず、負けてはならないとも思った。

さわやかな気持で私は学園を去った。川田先生のニコニコした瞳が何時までも私の背を追っている気持がして、私は秘書官を相手に果しなく思い出話を続けた。

独居の弁

私はここ数年来アパート暮しを続けている。逗子に家があるのだが、議会が始まると深夜に及ぶこと屢々であり往復もできかねるので、ずっとひとり暮しである。

さては流行の別居結婚、ひょっとしたら冷戦？などと勘ぐるそそっかしい人も居るかもしれないが、土台そんな洒落たものではない。まったく、ビジネス的実利的な理由に過ぎない。

女房が居ないとなれば、偶に手料理をやること位ある。一時、洗濯をする官房長官、労働大臣と書かれたが、本当なのだ。一度花嫁学校の講師にでもなって腕前をご披露に及ぼうと思っているくらいだ。いまは通いの女事務員さんに

大体やって貰っているけれども、自分でやっても少しも苦にならない。結構愉しいのだ。

家庭があるというのに、なぜ好き好んでこんな生活をしているかというと、私は元来血の気が多いのか、活動的なタイプにできているらしい。新聞記者を十年もやってきたせいもあるかもしれないが、なにしろじっとして居られない性分なのだ。仕事が大好きで、年中なにやかやととび廻っていないと落着かない。そういった人間には、変則かもしれないが自然こんな生活様式が適合しているのだと思っている。

仕事といえばこんな経験があったことを思い出す。岸内閣の官房長官として首相のお伴をしてアメリカへ行ったときのことだ。

そのとき外務省の若い官補が私のアメリカ在留中の秘書官事務取扱いを仰せつかって世話万端をしてくれたのだが、明日は彼とも別れるという日の深更、彼は真剣な表情で私の部屋へ入って来た。

「長官、突然でご迷惑と存じますが、人生問題について御意見を伺ってよろしいでしょうか」

突然で私はなんのことかと思ったが、真面目な態度なので、どうぞと答えた。すると彼は、朴訥とした口調で、こんなことを言った。

「長官の生活を拝見してますと、人生の幸、不幸について非常に考えさせられました。全然自分の時間をお持ちじゃない。朝から半分くらいは会議があり、昼は昼、晩は晩で全部予定がつまっています。買物も秘書官任せで、自分の気にいらない物でも、買ってきてくれたものでがまんするより仕方がありません。食事だって、衣服だってそうです。読書したり、思索したりする時間なんか、まったく見当りませんし、生活をたのしむ余裕もございません。長官はそんな

目の廻るような生活で幸福だとお考えですか。別になにもお感じになりませんか。私には分りません」

なんとか返事をしようと思ったが、とっさのことで生憎となにもでてこない。仕事が好きだから苦痛じゃない、などと答えたが、自分でも本音は釈然としなかった。

私は身体が丈夫だから馬力がきいて、どんなに忙しくとも苦痛でないことは事実であるが、本当をいうと遊びの方も相当に好きなタチなのである。私とて不死身の機械ではないから、せめて一週間でもいいから日程に縛られないで、ゆっくり送りたいと思うことは度々ある。深夜まで会議でくたくたになってアパートで目を覚ましたとき、折悪しく陰ウツな雨などがじとじと降っていて、今日は重要な仕事もそう大してない。久しぶりで一杯やろうと思っているときに予定外の来客や急用が突発したりすると、実際、大臣などご免こうむって蒲

団をかぶって狸寝入りをきめてしまいたくなる。

正直なはなし余り忙し過ぎるのもどうかと思うが、といって仕事がなくなったら私は到底生きている気がしない。

要するに仕事という怪物に呑みこまれて人間性を失ってしまったらモトもコもないのであるから、人間としてのバックボーンをがっちりとうちたてて居ればよいのではないか。仕事の内容や種類が問題なのではなく、それを処理する個々人の精神のあり方、行動が大切なのだとも考えている。

嘗て歌手の淡谷のり子さん、女優の淡島千景さんと対談したことがあったが、男でも女でも仕事を持っている場合その人の生活は孤独にならざるを得ない、と痛感した。

私の場合、自分の精神状態を狂わせたりする一番大きな要素は対人関係だと思っている。たとえば子供に対してもかなり寛大な自由主義者のつもりで、気

にいらないことやちょっと目に余ることがあっても、怒ってはならないとがまんをする。するとそのしこりが翌日の朝までいくらか残っているときがある。そうすると、議会に出ても、（あの時はああいう風にすませないで、子供が自覚するようにもっというべきことをいった方が却ってよかったんじゃないか）などと質問されている最中でも頭のなかにひっかかっていることがよくある。家事のことなどどっちにしてもたいしたことじゃないのだから、ビジネスをやっていく上には、そういう些事に影響されないような精神の平衡を保てるような生活をしていくことが一番いい。

淡谷さん、淡島さんが独身で居られるのも仕事をするにはそのような生活様式が便宜でもあり、必要なのであろうと大変失礼ではあるが私なりに推察した。

私はかねがね、パーマネント・バチェラー（permanent bachelor）の人々にすくなからず興味を寄せていた。仕事に憑かれて、一生独身で終った人々で

ある。

アンデルセンは子供たちを愛する余り童話を書くのに夢中になって結婚することなく生涯を終えた。パスカルは異常なまでの宗教の愛に身を捧げ、またゴットフリート・ケラーは「緑のハインリヒ」という小説を書いたが、祖国スイスの革命運動に命を燃やし続けて、終にわが身をかえりみるいとまがなかったという。かなしいことではあるが、仕事というものは人間にそのような苛酷な要求をするものなのであろうか。

まあ難しいリクツはぬきにして、私がアパート暮しをしているということ、カギの生活をしているということは、一言にして言えば、つまり〈孤独への憧れ〉につきるかと思う。この状態が自分でも一番たのしいことも事実で、決して必要だけでやっているとはいわない。

丁度二十歳前後の学生の下宿生活みたいなもので、家庭内の束縛から一定期

間離れていて精神的負担や煩わしいものがないから、自然気も若くなり、いつでも自由な状態である。のびのびと仕事ができる。

そんなフランクな状態であるから向うもつきあい易いのか、友人がすぐ出来る。私は政治家のうちではバラエティに富んだ友だちをもっていると思っているが、秘密は、案外そんな生活形式にあるのかもしれない。政治家にとって一番必要なのはバランスのとれた知識をもつことなので、専門の知識はそれぞれのオーソリティがいることだし、近代では聖徳太子のような万能という訳には誰もいかない。どうしてバランスのとれた円満な知識を持つかというと、結局いろいろな仕事にたずさわっている友だちなのだ。予想もしなかった人からこれはと思うことを聞くことがよくある。仕事をする上に、友人は大切にしなければならない所以である。

この頃はよく私の所に丹下キヨ子さん、霧立のぼるさん、林房雄さんらが訪

ねてきてマージャンをかこむことがある。

余談ではあるが、私はマージャンはスエズ運河から東では一番強いと思っている。すごい鼻息ではある。

勝負ごとは無闇矢鱈なファイトばかりではダメなもので、殊にマージャンは碁や将棋と違って技倆が基礎というよりも偶然性が多いわけだから、平常心というか、動揺しない心をもっている人に勝算が多いように思う。偶然性が多いものは必ず波がある。その波に、つまりペースにどう自分が乗っていくかというところに、人生も大体同じようなものだと思うけれども、勝負の強さ、弱さがあるような気がする。闘争心、いわゆるファイトがあり過ぎると、下り坂であるにもかかわらず、闘ってしまうからコテンコテンに叩かれる。闘争心は上り坂のときはいいけれども、下り坂のときは平常心が肝要だ。締めるところは充分に手網を締めなければダメだ。

坂口安吾氏だったか、菊池寛氏だったか、将棋の盤上に人生が躍如としているといっておられたが、たしかに勝負ごとはある程度その人の性格をうつしだし、人生を反映させる作用といったものを持っているようである。

大分独身礼賛や気ままなことばかり書いてきたが、では仕事のため、自分のcomfortableの生活のためなら、家族はどうなるのだ。家庭生活はどうなってもいいのか、という難問題が残っている。

「一週間に一度は、まあ大体週末になりますけど必ず家に帰って、娘とおしゃべりして散歩したり、映画など観に行ったりしてる上に、水曜日も大体帰るから三日は家庭にいますよ」

私の懸命の抗弁を淡島千景さんはさもおかしそうにきいていたが、

「女から見るとそんなタフな男は小憎らしいですわ。男の我ままなんですね。

だって心配のない、ちゃんとした家庭の裏づけがあるからこそ、そんなことができるんですもの」

と悪戯っぽい眼をクルクルさせて、ズバリ私の痛いところをつかれた。

実は私もそれは自覚している。こういうことができるのも、二十七ぐらいから中国に出かけたりして、ずっと一人暮しの野育ちの習慣がついていることや、非常に封建的な家庭の長男として育ってきた私のわがまま、勝手、それから経済的な負担をそう考えないでもすむ気らくな立場からなのであろう。

ともあれ世の亭主族も、自由学校の五百助ではないが、ハラのなかではときには家庭の束縛をとかれてやもめ暮しを切に憧れているのであろうが、そうは思ってもいろいろな事情で思うように果せず、結局こういう環境に入れるのは何万人に一人位になってしまう。そういう男性たちから羨ましがられている点からいっても、私は数すくない幸福な男だとも思っている。

酒を愛する

考えて飲み始めたる一合の二合の酒の夏の夕暮れ

世の中にたのしみ多ししかれども酒なくしてはなんのたのしみ

これは若山牧水のうたである。私は昔からこの酒のうたが好きで愛唱しているが、この連作が示している通り牧水は並々ならぬ飲み手であることがよく分る。酒なくしてはなんのたのしみ。いい歌だ。この一首だけで、牧水は酒飲みとしても一流の人物だと畏敬している。

元来、私もいける方なので、酒についてはそれなりに一家言を持っているつもりだ。

私の酒歴はかなり古い。父が好きなタチで、

「オイ博英、お前もそろそろ大人になりかかったんだからまあいいだろう。一杯いこう」

こんな調子で、十七、八のときから毎晩晩酌のお相手をさせられた。父も父だが、私もいい気なもんで嫌いな方ではないから遠慮なくグイグイ受けちまう。

しかし父の酒席の躾は一風変っていた。親爺の威厳を示すつもりだったのかもしれないが、中学生の私にキチンと正座を命じ、胸を張り手を両膝において威儀を正さなければ盃を受けることができなかった。なにしろこっちは（今だって似たりよったりだが）行儀の悪い遊びたいさかりだし、窮屈で足が痛くてたまらないからすぐ崩したくなる。オヤジの眼を盗んで横すわりになろうとする。すると途端に大喝一声、

「博英！」

とやられる。

また酔っていい加減いい気持になると口が軽くなって、どうですこのごろ景気はなどとへらず口の一つもたたくようになる。すると渋い顔をした父から、もうやめろ、さがってよろしいと言われた。

だからもっと飲みたいときは、足が痛かろうが感覚がなくなろうが、歯をくいしばって我慢しなければならなかった。イガグリ頭の中学生が酒を飲みたい一心で年寄の前にかしこまっている姿を想像すると、いまさらながら微苦笑を禁じ得ない。

しかしその当時の私にとっては、酒を飲むことは大袈裟にいえば一つの修業に匹敵するほどの苦しい業であったのである。こんな環境に少年時代から育ったせいか、酒に対してはミジンも罪悪感とかタイハイ的な気持は抱いたことがなかった。厳粛な気持であった。

こんなこともあった。あるときいつもの伝で晩酌のお相伴をしていたとき、

余りがまんして座っていたものだから足が痺れて立つことが出来ず、もんどりうってひっくりかえり、襖に大穴をあけた。てっきり酔ったものと思ったのであろう。そのとき父はしずかに言った。

「博英、酒は醜態を演ずるために決して飲んではならないよ」

そういう酒の作法というか躾を未成年のころから徹底して仕込まれたものだから、私の酒に対する態度もおのずから決まっていた。酔う前に、へべれけになる前に、みずからやめるということである。

爾来私はそれを金科玉条として実行している。だから一回にはそう沢山は飲まない。いまは殆んどウィスキー専門で、朝すこし、昼でも機会があれば少し、チビリチビリなめている。それから晩やって、一たんうちに帰ってきて雑用を済ませてから寝酒をやる。気楽なアパートの一人暮しだから、カーテンを開け放って爽やかな朝風を部屋いっぱいに入れながら飲む朝のウィスキーが一番お

いしいが、汗みどろになって一日の仕事を片づけ、負荷から解放されてひとりたのしむ寝酒の味もまた格別である。ともかく一日中いつでもいいのだから、仕末が悪い。

「それじゃまるで絶えず飲んでるんじゃないの。天下の代議士ともあろうものが神聖な議場を汚してさ」

などと、目くじりたてた主婦連のオバ様達からお叱りをうけそうであるが、朝と昼はそう体に残るほど飲めぬし、甚だ残念なことに議題を審議している昼間は勿論のこと、夜分だって私の酔ったのを見た者は恐らく誰もいないのではあるまいか、要するに生来の酒好きは間違いないところだが、本当に私は自分が酔っぱらうのも嫌いだし、同時に他人の酔っぱらいも嫌いである。酔っぱらうそれ自体もそうだが、それに付随する酒のいきおいをかけてグチる、怒る、泣く、意味もなく追従笑いをするなどという恰好は男子として余り見られた図

ではないし、酒のうえのことだから、ツイなどという甘えた根性や特権意識、または劣等感や自己嫌悪を酔いによって逃避するなどというケチな飲み方に至っては、不甲斐なくて背骨をどやしつけたくなる。しかし酒飲みにはいろいろな飲み方があるものだ。元運輸相をしたわれわれの仲間である小沢佐重喜君が、嘗て私の顔をしみじみ見ながら言ったことがある。

「君は酒に酔いそうになるとすぐやめてしまうけれど、一体それで面白いのかネ。なんのために飲んでるのかね」

私はすかさず言ってやった。

「酒は面白くて飲むんじゃない。うまくて飲むのだよ」

「そうかねえ、それも一理かもしれないけれど、僕はまあなんというか、酔っぱらって小唄の一つでもとびだすのが面白くて飲むのだがね」

「酔ったフリをするんじゃないのかい」

「いや正真正銘酔っぱらうのが面白いんだ。君は理性派だねえ、そういう飲み方もあるんだねえ」と半ばあきれたような表情をしたものだ。

自然私は酒についての節度というか、おいしく飲める自己のペースを心得ていて、それを無理強いさせられたり、乱して貰いたくない気持が強い。

だから私の一番苦手なのは、宴会というやつである。

東京ではおながれ頂戴といい、私のくにの秋田では差し上げるというが、いわゆる献酬、あれにはへこたれる。私はウィスキーしか飲まないからということと、自分のペースで飲まないとおいしくないから注がないでくれと、あらかじめ挨拶をしても全然受けつけてくれない。日本ではそういう酒飲みは生意気であるとか、わがままである、非社交的であると最初からきめつけているのであろう。

「なんだオレの盃がおかしくって受けられないのか」

「どうせお口には合わぬでしょうが」

とからまれて、散々な目に会う。なにしろ百人のお相手をすると軽く一升になってしまう。

こんな話をきいたことがある。長谷川一夫さんは全くの下戸で、盃ひとつも口にできぬそうな。ところが宴席はしじゅうある。例の献酬がはじまる。飲めませんじゃ通らない。そこは人気商売、ましてAの人を受けてBのを受けぬという訳にはいかぬから、注がれたら片っ端しから受けるそうだ。ただしマトモに受けたらのびてしまうから、汁のものを吸う恰好をしてお碗などに吐きだすのだそうだ。ひとつの感情を害さぬためには、酒のために随分辛い思いをすることだナと思った。私は酒の味を知っているから、そんな思いまでしなくて済むが、下戸の人は気の毒である。

ところが私の場合には、飲み手であるがために大変辛いことがあった。

郷里で歓迎をうけた。あの大将は若手に似合わず呑み助らしい、いけるクチだなどと評判が伝わったものだからたまらない。どうぞ、どうぞと次々に茶碗がつきだされる。

戦後ドブロクしかなかったころのことだ。久しぶりで帰ってきたというので。丁度そのとき、酔眼モウロウとした私の眼に異様な風景がとびこんできた。ヒゲ面の父ッ様が茶碗のフチを先刻からしきりとペロペロなめていた。首をふりふり顔を埋めるようにして、茶碗の底までもなめている。舌が届かなくなると、指のハラで拭いてはなめた。

やがてその紋付、袴の父ッ様がうやうやしく私の前ににじり寄ってきた。

「差しあげますだ」

私が吃驚してどぎまぎしていると、

「飲めぬとは言わしませんぞ」

と貧乏徳利を逆手にこわい顔してつめよった。ドブロクのカスまで綺麗になめて持ってきたのだから、これ以上の礼はないとその顔は不満そうであった。

「さあ飲めるんでしょう。飲めない人なら見逃しますが……。あなたの飲みっぷりを見ているとまだ十杯はいける。許しませんぞ」

結局私はその茶碗をおそるおそる受けた。トクトクトクと白いドブロクがすかさず注がれる。じっと父ッ様は私の手許をみつめている。あんな現場を見てしまった以上、私はのみこむ訳にはいかず、さりとて吐く訳にもいかず、進退きわまってなにかうまい名案はないものかとあたりをキョロキョロ見廻した。

が、別にこれといった妙案も思い浮ばない。ええっ、ままよ。生命には別条ないだろう、と私は決心して、半ばヤケクソでごくりと呑みこんだ。その音を耳にしたときやっと覚悟がついて、眼をつむると一気に呑みほした。

「お見事、お見事、さすがお若いだけに」

父ッ様は眼をまるくして、手をたたいて喜んだ。

しかしこのときばかりは本当に情ない気持で、酒飲みも因果だなあとつくづく思ったものである。

親と子の心

二年ほど前、劇団民芸が、「アンネの日記」を演ずることになり、その主人公を一般に募集、新劇の主役を、舞台をふんだことのない人から決めるというので話題になった。

その時の新人に三井美奈さんが選ばれたことは、御承知の通りだが、実はあの時、私の上の娘、はるみが私に内緒で応募の願書を出したのである。

娘がちょうど芦ノ湖の方に出掛けた留守中のある日、民芸から第一回目の通知が娘宛に舞いこんだ。なんでもアンネの日記について、応募者にアンケートを求めたものだったように記憶している。

私はこの通知をみて、まったくドギマギしてしまった。文学好きの娘がそう

いう方面に興味を寄せていることは、日頃の雑談の中でうすうす知ってはいたが、こんな熱の入れ方だとは、その時はじめて知ったのである。

娘は今年十八歳になるから、その当時は確か十六だったと思う。親の眼から見るといつまでも子供だと思っているのに、いつの間にかそんな年頃に成長していたのか、と思っておどろいた。

「こりゃあ、ウカウカしていられないぞ」

私は、ひとりでそうつぶやいたかも知れない。

それで私は、はじめは親に内緒で、そんな思い切ったことをやってはイカンじゃあないか、としかりつけてやろうと思っていたのである。しかし、あれこれ考えている中に、子供だ子供だときめていた娘が、いつの間にか自分の意志で、何事かをやろうという気持にまで成長したことが、なんとなく面映ゆく、そしてだんだん嬉しいような気持にもなってしまった。

親バカとはそんなものであろうか。それで私は、とうとう秘書に頼んで、その民芸からの通知書に、「アンネの日記」を一冊そえて娘の所に持たせてやった。娘が帰京した時に、こういう行動に出る時は、お父さんに相談しなくてはいけない、と一応の訓示はしたのであったが、強くしかれなかったのである。

娘はこの応募で最後の十人ぐらいまで残ったが、とうとう落選してしまった。その時は、娘のために多少気の毒な気もしたが、私自身の気持からいえば本当に心からホッとした。

その後、映画演劇に対する娘の〈熱の入れ方〉は、一時より大分うすらいだ。しかし、不思議なもので、この民芸の一件を何処からともなく嗅ぎつけて、こんどは先方側から時々〈さそいの手〉のようなものが、かかって来るようになった。つい最近も、ある映画会社のスカウトに引っぱり出されて、娘は撮影所まで面接に出掛けたが、これも幸いにしてウヤムヤのうちに終った。

その度ごとに娘に強いことはいえないくせに、私はヒヤヒヤしているのである。

映画演劇に身を投ずるということは、簡単にいえば、私の娘が女優さんになるということである。その世界が、いかにきびしいものであるか、社会のことに未熟なわが子にはわかっていないだろう。その後、幸い娘の気持が変ってきているからいいようなものの、本当にとびこむということになったら、親の方がまず一大決心をしなければならない。

しかし、私は——その時もそうであったが、娘の気持をできるだけ尊重してやりたいと思っている。心の底からその道を志し、責任をもって努力しようというのであれば、娘の意志を無理に曲げようとは思っていない。そしてりっぱな新劇の女優になってもよいじゃないかと思っている。子供の教育に、一方的な押えつけは禁物である。たとえ親の愛情から出たものであっても、子供の意

志を無視した一方的な押えつけは、かえって子供の反撥を買うだけであろう。

私のオヤジは、この点随分きびしいやり方だった。

従ってまた、私もことごとに父に反撥し、それが習性となって、知らず知らずのうちに、権力者とみれば、善悪を度外視して、生理的な嫌悪を感じ、闘志を湧きたたすという困った病癖をもつようになった。早稲田の学生時代、私は学生消費組合運動に参加して、たびたびブタ箱にほおりこまれたものだが、その時も、そもそもの動機は配属将校が「学消」に近よってはならぬ、と言ったからである。

石橋湛山氏ら大物追放解除によって吉田、鳩山抗争の火ブタを切った争いの自由党反乱軍時代、倉石忠雄君らと吉田さんに散々たてついた頃も、私は吉田さんの権威の中に親爺の姿をみるような思いで、闘志を燃やしたものだ。

自分がオヤジになってみると、死んだオヤジのいい面もわかるようになる。

私の父は、正直で曲ったことの全然できない人であった。終戦後六十二歳で世を去ったが、あの食糧難の時代に、米どころ秋田の小都市に住んでいながら、闇のにおいのするものは一切口にしなかった。そのため、五尺三寸、二十七貫の超肥満型が、わずか一、二年で十二貫余となった。まったく、かくれた山口判事事件のようなものだ。

そういう父の眼からみれば、私の生活態度は不満だらけだったのだろう。

しかし、父と私の性格上の差異は別にして、家庭内における父の暴君ぶりには、私は是非善悪の判断のつかないまま素直に子供心にイヤな思いを味わった。自分がイヤだったことを、再びくり返して子供に押しつけようとは絶対に思わないし、子供にはそれぞれの夢があり、生き方があると思う。

私には、「アンネの日記」に出ようとした娘の下に、もう一人今年十六歳になる妹があるが、この二人を較べてみても、顔付から趣味、性格まで、同じ親から出たものだとは、思えないほど違った面をもっている。上の娘がどちらかといえば、外を出歩くのが好きなのに、下の娘は同じ友達と遊ぶのにも家に集まって本をよむ、という具合にすでに活躍家型と良妻型の差をみせている。それを一々自分の好みに合うように教育しようと思っても土台無理な話だ。

私はつねづね娘に対しては、かくしごとをしないこと、自分の行動は自分で責任を持つこと、責任のとれないことはやらないこと、この三つを繰り返し教える。いまのところ、結構そんなことでうまく行っているようだ。年頃になって、たとえラブ・レターが舞いこんでも、娘は私にみせてくれるものと信じている。

わが女性観

近頃は女性の職場への進出が大変な数にあがっている。猫も杓子も、職業婦人である。

彼女らが狭い家庭生活に閉じこもらず積極的にあらゆる分野に進出し、各自の能力に応じていろいろなことを学び、社会に貢献する機会を得ることは結構な趨勢だと思っているが、一人の男性として、彼女らの生活態度に意見がない訳ではない。

私は新聞社に勤めていた時代と、代議士時代に自分で実際に女性を使ってみた経験から割りだしてものを言うのだが、まず結論から先に言うと、非常にいい人と、有能だが困る人と、それからもう一つは採用して後悔する人と三通り

にわけられた。

新聞社にいたころ、私についた女性の一人になかなか仕事のできる人がいた。然し、他の人と調和がとれなくて困った。

自分の利巧さを鼻にかけるのである。女性の同僚には木でくくったような挨拶をしていた。仕事への誇りはいいけれども、プライドが虚栄にとって変ってはもう手がつけられない。

それにこの人は若くて、ちょっとした美人ときていたからそれを充分自覚していて、その自信を認めないとご機嫌が悪い。派手な性格で、しじゅう髪型や服装を、手を変え品を変えとりかえていたが、まさか、

「君のプリンセス・ラインはシックでいい」

「なんて素晴らしいピンカールなんだろう」

などといちいち賞めていたのでは仕事にならぬから、うわべはさりげなくッ

イ無視した態度になる。美人秘書はそれが不満で、自分の美が認められぬことを口惜しがり、一日中ふくれかえる。ちょっとでも賞めればご機嫌はなおるのだが、直ったら直ったで日頃の調子を乱す。

概して女性の場合は、仕事に不必要な感情が多く、ビジネスライクに扱えないことが困る点でもあり、ひとつの仕事をコツコツと長くつづけていこうという考えもないことが、一つの欠点でもある。

また、われわれのような場合は、議会は夜中にも行われるわけで、非常に不規則なときが多いのであるが、そういう場合、女性は先に帰さねばならないような条件上の制約がありすぎる。だから結局、女性には責任のある仕事は持たせられないということにもなりかねない。

私の知っている会社から、あるときこんな話をきいたこともある。

その会社は一流上場会社で株主の数も何万人といるのだが、新規に採用され

た女事務員が数人、株式課に配置された。かりにA嬢とB嬢としておこう。A嬢は大学出のレッキとした法学士であり、B嬢は高校卒業生である。二人は何れも受付近く座らされて、ひがな一日株主の印鑑簿の整理を仕事としていた。配当金の受領印鑑とか、名義書替の押印は届出の印ということに法律で規定されているので、地味なビジネスではあったが大事な受持であった。

円い印とか四角い印、どっちが字の頭なのかもさっぱり分らぬ草書風の印、小さな印……。ともかくそんな雑多の印が何千箇となく帳簿につまっているのだから、すさまじい。

B嬢はコツコツとその仕事をあきもせず熱心にやっていて、終いにはそれらの判コの特色を印鑑簿を見なくとも分るまでに慣れてきた。ところが大学出のA嬢は、

「最高学府を出たわたくしを、そんな単純な子供にでもできるビジネスにつ

けるなんてヒドイわ。ましてお茶くみなんかさせて。法律を勉強したんだからもっと高度な、もっと難しいポジションにつけてくれてもよさそうなのに。まったくわたくしを侮辱してるのにもほどがあるわ」

と最初からそんな思いがハラのなかにあるから、自然仕事にも身が入らぬ。ところが会社の幹部は、見習としてやらせたあんな単純な仕事ができないのだから、とても責任のある難しい箇所につける訳にはいかぬ、と見ているのだ。

これは一つの寓話ではあるが、女性の教育と仕事に関する盲点を衝いているのではないかと思う。教育というものは、就職のためにあるのじゃないということを認識しなおしてもらうこと。大学を出たから、高等学校出と同じ仕事、同じ給料じゃいやだ、別扱いをしてもらいたいというケチな根性をまず捨てて、教育はあくまでも円満な常識を涵養するためのものなのだ、と割りきって貰いたい。

私がはじめて新聞記者になったとき、男ではあったが或る期間お茶汲みからさせられたし、寒空に立番もずいぶんさせられた。軍隊の新兵教育みたいなことを、だいたいみんなやらされてきたわけである。だからといって女の人にこんな無茶な職業教育を体験しろとはいわないが、要は仕事を真剣にしようと思ったら男性、女性の区別がないということをいいたいのである。

入社する時は同じ試験をうけて入ってきた仲間と、十年、十五年の間に差をつける唯一の道は、ひとよりよけいに働くことだと思う。それ以外に差のつけようがない。持って生まれた天分もあるけれども、そうは違わない。労働基準法にはずれるようなことを奨励する訳ではないが、夜勤のときは昼勤もやれ、昼勤のときは夜勤の手伝いも半分くらいやれ、それをやっていれば仕事の要領も自然ひとより早くマスターする、と私はよく話したものである。

私は仕事というものは天下りに与えられる性質のものではなく、自分で取るものだと考えている。いわば奪い取る程の気力が必要だと思う。社会は競走激甚な修羅場なのだ。だから仕事に取りついた場合には、奪い取るのだという気魄を男も女も共通に持たなければならないと思う。ところが女の人の場合には、いろいろ原因はあるのであろうが、それがない。ないといえるほど、まったくすくない。

勿論数多い女の人のなかだから、あり過ぎるタイプの人もいることはいる。国会なんかで、大根のような腕をふり廻しながら、

「なにいってンの、こんちきしょう」

と突拍子もないかなきり声をあげている、お化粧をしたリッパな婦人議員が現にいる。これなどは気魄の過剰というより、なにか変態的な存在である。

婦人議員といえば思いだすのだが、売春防止法に関連してそのアフター・ケアーを特別の事項として取扱えと彼女らはいいはるのだが、私はこんな区別を

した扱いをしたら絶対に効果はない、と強く主張した。

労働省に居たとき、私はよく婦人局長に言ったことを覚えている。

「売春婦を何人更生させたという報告はする必要はない。そういう報告をしようとする精神自体が土台まちがいだ。むしろ彼女らの前歴は聞かない、かくしてやるようにする。書類が不充分で履歴にブランクができた場合は、あたたかい気持で適当に書き入れてやる。そのくらいの思いやりが必要だ」

更生を妨げる大きな隘路は、前歴の傷を好奇な眼でとやかく言うことなのだから、アフター・ケアーを特別事項に扱えとは、〈仏を作って魂いれず〉一応形だけ世話をして、あとはこわれても知っちゃいないという傍観者のやり方である。

私は、この偽善者め！と思う。女性として当然持つべき筈のデリカシー、やさしさ、いたわりが全然欠けているではないか。なにか人間として精神的な片

輪のような気がする。

だから婦人議員、婦人評論家は、まず第一に必要なことは、「婦人であること」である。大体「元婦人」が多すぎる。それに他の婦人や、恵まれない人たちに対して、何か恩恵を与えるような、指導をしてやるというような優越感がチラチラ見えるのも気になる。自意識が過剰であるようにも思う。

私は結婚式の媒酌を頼まれたり、祝辞を言わせられたりするときに、必ずこう言っている。

「とにかく旦那さんに可愛がられる奥さんになりなさい。それがいちばんだ。そして、何時までも女らしくあること。下手に婦人の偉ら方のいうことを真似て、揚句のはて、旦那様に嫌われても婦人の偉ら方は決して助けてくれませんよ」

女性が仕事を一生女らしさを失わないで続けるのもよし、結婚が理想の生き場所だと考えたら家庭に入るのもよい。ただその場合、人間関係は仕事の奪いあいとは違うのだから、夫婦のあいだを対立物のように考えて、家のなかで威張りかえってみても年月がたてばそうは続かない。

社会の一つの構成単位として、家庭を相互の良識と努力で努力しあって、建設していかなければならない。私は近ごろの男女間において、この努力が足りないように思う。仕事においては権利も主張せず、無欲であった婦人が、家庭に入ると途端に男性を対立的な関係で見るような考え方に変ってしまうが、これから新しく成長する女性にとってこういう方法はあまり幸福ではないようだ。

なにも亭主関白に盲従しておればよい、などと封建的な気持はさらさらないが、男性はどういう女性を望んでいるか、つまりたのしく長続きする家庭のフンイキをつくるにはどうしたらよいかという点で、次の話など参考になれば幸

いである。

この前大阪に行ったのだが、そのとき新聞社の連中が、東京の女と大阪の女は違いますかというから、

「東京の女はどうもリクツばかりいっていてサービスをしない。そこへいくと大阪の女は細かいことまで気がついて、男にサービスする気持が強い。君たちは映画の「夫婦善哉」っていうのは見たか」

といってやった。

たしかに男にとっては後者の方が都合がいいことは事実である。こんなことをアケスケに書くと、元婦人連が柳眉を逆だてるに違いないが、リクツをつければつけられると判りながらも理屈をいわないで、黙って、テキパキ物ごとを片づけてしまう。そうすると男の側でもグッと応えるものなのだ。ぱっぱっとドライに処理することと、女らしいウエットないたわりは決して共存を許さな

いものではなく、バランスを失わないで時々に応じてだして貰えれば至極快適な生活が送れること間違いない。それが女性の生活の知恵というものであろう。

家族のことに話が及んで恐縮だが、私は自分の母親によって婦人の理想像ともいうべきイメージをながらく抱きつづけてきた。

私の父親というのはとんでもない暴君で、たとえば私の学業成績が悪かったりすると、私を叱らないでおふくろを叱る。長い間、父のそんな扱いにも耐えて、ほんとうに子供に対して献身的であった私の母は、いまから考えてみると、やはり頑としたバック・ボーンを持って、そのバック・ボーンで子供の行為を律した立派な人だと思う。

男でも、大正あるいは明治の女の人に育てられた男の人と、いまの女の人に育てられた男の人のバック・ボーンはたしかに違う。たとえば、最近の大学の入学試験風景。女親のついてくるのが多いこと、多いこと。ちょっと唖然とする。私は小学校四年のとき転校試験を受けたが、そのときでも母親なんかついてこなかった。今の母親には男の子を育てる背骨がないのだ。

それからこれは婦人に限ったことではないが、愚痴と不平を言わぬこと。愚痴と不平ほど無益で自分と相手と双方を不愉快にするものはない。ところがこの愚痴と不平は婦人の特権であり、これを黙ってきいてやるのがフェミニストの資格であると言う人がある。愚かしい痴(ばか)げたことは言わぬにこしたことがないのだ。

こんな私だから家庭内の亭主としての点数は決して良好ではない。

ある週間誌に私の妻は「面白い人間だけれど亭主としては五十点」と述べていた。参考に他の号を見たら他の人には大体九十点か百点を貰っていた。ウマクごまかしているなと私は思った。

二人の娘が、私がきいているとは知らないで、

「父さんは親父としては満点だけれど、亭主としては三十点もないわね」と話していた。

そうかも知れない。

最後に私の娘であるが、十八と十六のいまやハイ・ティーンの花ざかりといった二人の娘がいる。別にロガビリー族や太陽族にかぶれていないのは感心だが、姉の方はなかなかやん茶で気が強く、ぱきぱき主張してオヤジがやりこめられたりしているが、妹の方はうって変っておとなしい。

たった二人の姉妹がそれぞれ性格、ものの考え方の違うのも面白いが、私はそれよりも、どちらの女性が果して異性に気にいられうまくやっていくかということに、父親としてよりも一人の男性として、実は興味ぶかく見守っているのだ。

あとがき

戦後私は三十二歳で政界に出て、早いもので満十一年余になった。私なりに悔いなき、懸命の働きを続け、大目的であった石橋内閣の成立にも成功したし、四十歳そこそこで入閣したのであるから、世間的には成功者の一人であるかも知れない。

然し、このたび、一年半ぶりで政府を去って、自分の時間を少しゆっくり持ち、いろいろと過ぎしかたを回顧してみると、何か〈虚しさ〉を感ずる。天与の反省と勉強のときを得たのであるから、まず第一に、この十一年の反省からはじめ、忽忙の中に置き去りにして来た勉強、特に読書とものを考えることをして見たい。

それには、何か書いて見ることだ。

こう思っているところへ東京書房が、私が今まで書いたものをまとめて本にしたいという。然し、東京書房が集めて来たもののなかには、私が、例の反乱軍時代に書いたものが三篇もあって、いまさら公表するのは困るし、それに甚だしく、時期はずれで、今の読者には相当の説明がないと理解しがたい。そのうえ、労働問題や国会法などに関するものは、東京書房の方で、「カタくって駄目」と言う。

そこで既に公表されたものは「青春の季節」「抵抗の旗手」「宰相の良識」の三篇だけとなり、のこりの数篇は私が退官後、書き散らしたものを整理して一冊の本となった次第である。慢然たる回想記でもあり随想でもある。自分としては、もっと落着いて書いてみたいと思わぬでもない。不満足なものが多い。しかし、大きな戦争をなかに成長した、若い保守党政治家の生活と意見を世間

に知ってもらうことも、日本の政治家を理解してもらう一助となるかも知れない。

ただ十数年ぶりで、毎日、朝から夜までペンと親しむ生活を送り、赤インキで指を汚して、懐かしくもまた楽しくもあった。

三田にて著者しるす



大臣室における著者



勝負の孤独

昭和三十三年七月二十八日初版発行
定価三〇〇円

著者　石田博英
発行　木原宏
編集　藤崎妻虎張
印刷　亨有堂印刷所
製本　丸山製本所
整紙　仁木商店

発売　株式会社　東京書房
東京都渋谷区上通四丁目三十番地
電話四六局六二三〇・一〇七七番
振替貯金口座東京八一一三三番

落丁乱丁の本はお取替え致します